

大阪湾沿岸地域史の考古学的考察

村川 行弘

1. はじめに
2. 旧石器時代
3. 縄文時代
4. 弥生時代
 - (1) 弥生前期
 - (2) 弥生中期
 - (3) 弥生後期
5. 中国史料にみえる倭国の記事
6. 古墳時代
 - (1) 前期古墳
 - (2) 倭の五王について
 - (3) 中期古墳
 - (4) 後期古墳
 - (5) 終末期古墳
7. 古代

キーワード：地域史の実証

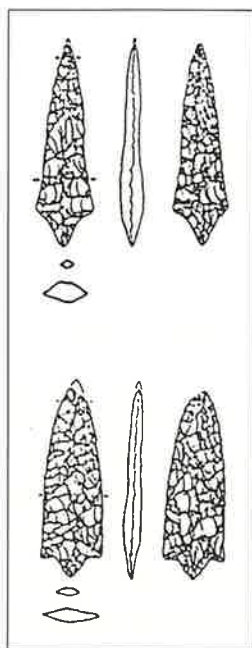
1. はじめに

朝鮮半島の支石墓には青銅器・鉄器などの副葬品がみられるが、鏡の出土例は聞かない。日本の支石墓・石棺墓からは漢鏡やガラス製勾玉なども出土する。日本に輸入された鏡や青銅器は仿製されると大形化する。墳丘の大形化も同様である。日本・朝鮮半島・中国大陸出土の遺物・遺構の比較研究を通じて、日本列島にのみ遺存するもの、朝鮮半島にのみ発見されるもの、中国大陸に存在するもの等が明らかにされている。

る。輸入にせよ、受け入れにせよ、全ての文物が搬入・影響されたわけではなく、選択され、創作されて地域的特性を示していることが判明している。東アジアという視点からみた比較研究を通じて、同時代的特色を明らかにし、各時期の政情・社会・文化の地域的特性を考察する手掛かりとして、大阪湾沿岸地域の遺跡・遺物の概要を紹介したい。

2. 旧石器時代

大阪湾沿岸で前期旧石器を出土する可能性が指摘されているのは、明石市西八木の地質学的に5～12万年前と推定される遺跡である。明石市藤江川添遺跡でも5～12万年前の砂礫層から、長さ約8センチのメノウ製のハンドアックスが検出されている。しかし、現状での大阪湾沿岸地域の出土遺物からみると、大半は後期旧石器時代に属する3～1万年前のもので、大阪府下で100余、兵庫県下で150余（播磨地域に集中）の遺跡がある。C¹⁴の測定結果からは2万年以上まで遡るといわれている。大阪湾沿岸地域の後期旧石器は、サヌカイトと呼ばれる安山岩系の石材を使い、石塊から横に長い翼状の剥片を切り出し、これからナイフ形石器を作り出す国府型ナイフ形石器が主である。これは藤井寺市国府遺跡出土の旧石器を標式としている。



淡路島出土の有舌尖頭器
（『兵庫県の考古学』より）



伊丹市荒牧出土の有舌尖頭器（伊丹市教委提供）
（現存8.5cm）

大規模な石器工房址の検出された羽曳野市翠鳥園、住居址の発見された藤井寺市挾山梨田、竪穴式住居址の発見された堺市南花田、生活址遺構の検出された芦屋市朝日ヶ丘をはじめ、枚方市津田三ツ池・讃良川床・楠葉東・藤阪宮山、東大阪市鬼虎川・山畑、大阪市長原、八尾市八尾南、高槻市郡家今城・津之江南、吹田市吉志部、高石市大園、和泉市父鬼、三田市溝口などが知られている。中国山地系の縦長剥片を素材－国府型ナイフ形石器－宮田山型ナイフ形石器－小形ナイフ形石器－細石刃－有舌尖頭器と移行するといわれているが、兵庫県氷上郡（大阪経済法科大学が確認調査）では2万数千年前とされる始良丹沢火山灰堆積層の下層から大規模な旧石器遺跡群が検出され、旧石器の分類や編年の重要資料を提供し、ナウマン象待伏せ地の推定もされている。この地域では国府型石器は発見されず、縦長の剥片をつぎつぎと剥ぎとる石刃技法が主体であり、石材もチャートが主であり、大阪湾沿岸の

旧石器文化圏とは異なる様相を示しており、三田市溝口でも同様のことが言える。一定地域内での移動生活が主であり、他地域との交流はあったであろうが、地域的特性も育成されていたと考えられる。旧石器から縄文早期にかけての時期に播磨南部の地域を中心に有舌尖頭器がみられる。

石器にはナイフ形石器以外に、尖頭器・搔器・彫器・石核・削器・刃器・台形石器・その他の石器があり、製作技術の変遷や編年も把握される現状である。しかし、各種石器の明確な用途や石器の形状の変化にともなう社会生活の状況や食料資源などの問題については未だ確たる実証資料には恵まれていない。2万年以上までさかのぼるという時期についても、C¹⁴の測定結果を参考にした相対年代にすぎない。立地からみた場合、水辺から離れた地域が多く、漁撈関係の遺物は見られないので、一定範囲の移動採集が主であった時期と考えられる。

3. 縄文時代

縄文時代は早期・前期・中期・後期・晩期に大別されている現状であるが、大阪府下で300余・兵庫県下でも300余の遺物出土地が判明している。兵庫県下最古の遺跡は、北部の但馬地域で、大屋町上山高原の隆起細線文土器・別宮家野の爪形文土器・撚糸文土器、阪神間では、芦屋市山芦屋と境川の山形押型文・楕円押型文土器、神戸市東灘区岡本と岡本北の山形押型文土器、淡路島の北淡町育波堂の前の楕円文・山形押型文土器、緑町倭人安住寺の楕円押型文土器をあげることができる。岡本遺跡では早期の住居址2棟が検出されている。

早期の土器は、豆粒状土塊を土器面に張り付けた豆粒文土器、中国東北部から朝鮮半島を経

由して伝来したらしい隆起線文土器、爪先で土器の表面に文様を付けた爪形文土器、軸の表面に縄紐状のものをコイルのように巻いたもので文様をつけた撚糸文土器、米粒状文・山形文・格子目文などを施した押型文土器という順序で縄文早期の土器の特色が考えられている。勿論、撚糸文の方が押型文より後出ではないかと考えられる遺跡もある（別宮家野など）ので、現状での目安である。石器には石鏃が多量に検出されるようになる。C¹⁴を参考にした年代は9000年前まで遡る可能性を示しているが、今後の検討課題でもある。大阪府下では交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡が早期押型文土器の標式遺跡となっている。

縄文前期はC¹⁴による年代測定では約8000年前の数値が示されている時期である。この時期は世界的に温暖化があり、海進現象で海面が15メートルほど上昇した時期である。青森県三内丸山遺跡を代表とする巨大集落・巨大構造物柱痕が北海道から北陸の日本海側にも見られる時期である。

大阪湾沿岸では、爪形文土器（北白川下層Ⅱ式）と羽状縄文（植物繊維を撚糸にして土器の表面を回転させながら施文）のほか、条痕文・刺突文・竹管文などの土器文様がみられ、鉢形・深鉢形土器が多い。また、おびただしい打製石鏃や石匕・石斧・石（投）弾・叩石などの石器をとともなう場合が多く、狩猟・採集生活色の強い遺物である。

大阪府下では藤井寺市国府・富田林市錦織・高槻市柱本（前期末の大歳山式）・箕面市瀬川（石器を多量に出土）、兵庫県下では芦屋市山芦屋・朝日ヶ丘（住居址状遺構）、神戸市中央区雲井（初頭の羽島下層Ⅱ式・条痕文）・垂水区大歳山（特殊突帯文をもつ前期末の標式土器・

大歳山式）、龍野市片吹（北白川下層Ⅲ式）、高砂市日笠山貝塚、家島諸島の西島東オドモ（北白川下層Ⅲ式）、淡路島では北淡町育波堂の前（中葉の磯の森式・後半の北白川下層Ⅲ式・末葉の大歳山式）・淡路町ナキリ（大歳山式）・洲本市安^{あいが}乎石井・洲本市宇山武山などがある。

大阪湾沿岸地域の縄文前期土器については洲本市宇山武山出土土器に関する丹羽祐一氏の分析があり、概略次のようになる。

「1類は二枚貝腹縁より調整痕をもつ。1A類は無文、1B類はD字形刺突文、1C類は連続爪形文、1D類は沈線文または半截竹管文、1B類は羽島下層式の主体をなす。

2類は器壁内外面をナデ調整し爪形文を持つ。2A類はC・D字爪形文、2B類は連続爪形文を施す。

3類は2A類の爪形文を半截竹管による平行線で画した土器で、磯の森式に比定される。

4類は半截竹管・ヘラ・棒状工具による押し引き文が施され、彦崎乙1式に比定される。

5類は低い貼付け突帯に縄文・刻目が施され、5A類は突帯上に縄文、5B類は突帯上に斜めの刻み目、5C類は突帯上に縦に刻み目を施す。

6類は縄文施文後、太い沈線を口縁直下に数条巡らす。

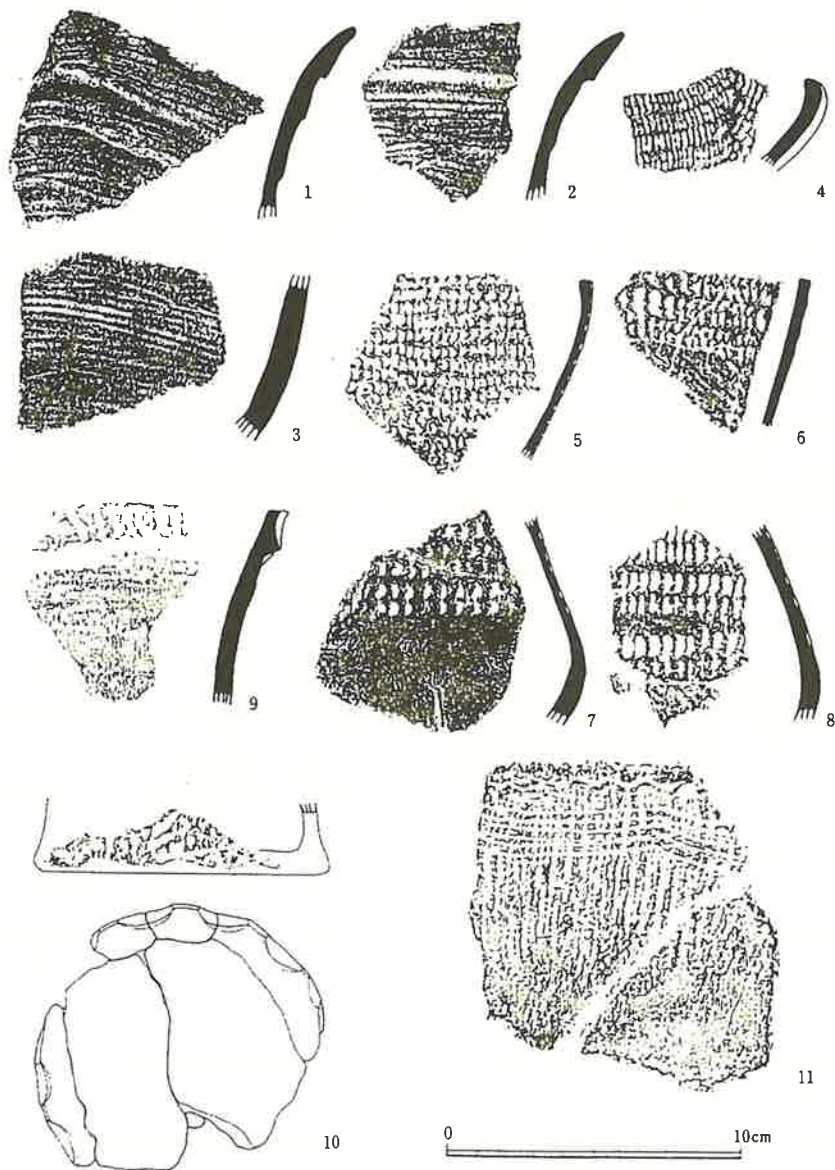
7類は縄文だけを施す。

8類は磨消縄文が施されている。

9類は沈線文を施す。

10類は半截竹管による平行沈線文を施し、縄文地か無地かで2種に分類。

11類は縄文地に特殊突帯文（断面半円形の細い突帯）をもつ。北白川下層Ⅲ式・里木Ⅰ式の標式的土器。特殊突帯文には半截竹管による密な刻み目のものと、半截竹管によるナデ引きだけで刻み目を欠くものがある。口縁部の形態から、11A類は直立する口縁部に縦位に特殊突帯



雲井遺跡出土の縄文前・中期の土器 (『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』)
 1～3 早期末表裏条痕土器 4～8 羽鳥下層Ⅱ式 9 型式不明 (前期末?)
 10 北白川下層Ⅱ式 11 船元Ⅳ式 (『兵庫県の考古学』より)

縄文前期・中期の土器

文を付加、11B類は口縁部がたが箍状に折り返され、その部分に縄文が施される。

12類は11B類と類似するが、縄文だけが施さ

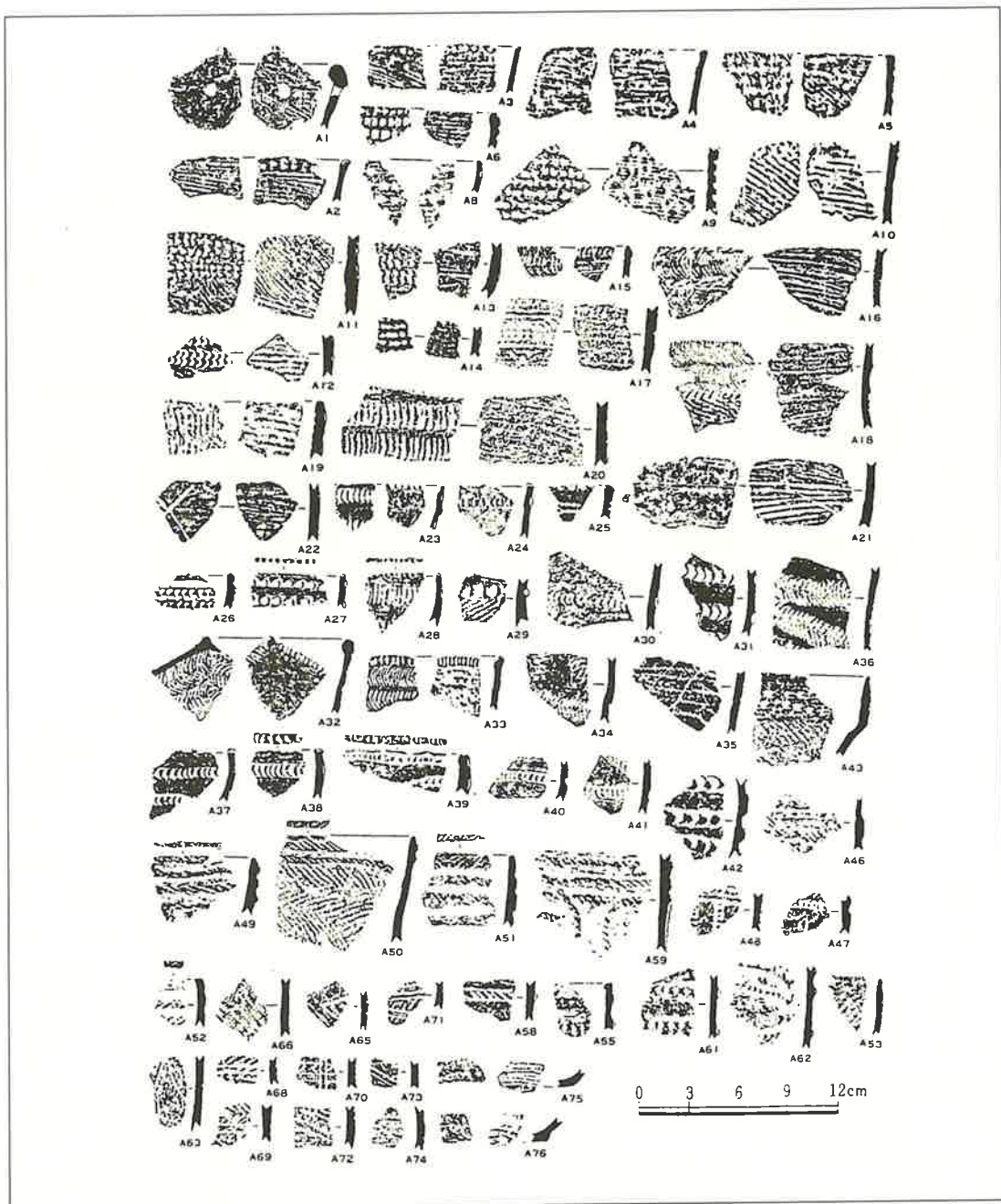
れ、里木Ⅰ式に類例がある。12A類は口縁部に扁平な粘土紐を横位に貼付け、12B類は粘土紐貼付けを省いたもの、12C類は口縁の内反度の

低い土器である。

13類は12C類と似るが、口縁部の折返しが段状になる。

14類は口縁部が外反し、口縁内面に縄文を施す。

15類は大歳山式と呼ばれる土器である。キャ



武山遺跡出土縄文式土器（1類～10類）（『兵庫県の考古学』より）

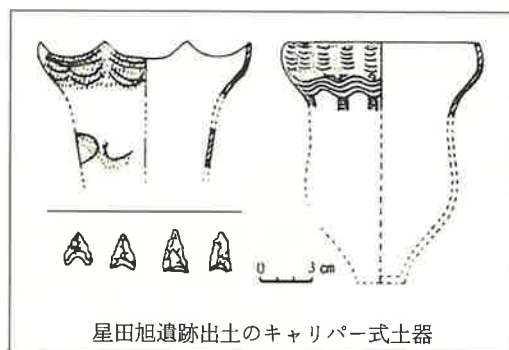
リバー状の口縁内面に1条の粘土紐を貼り付け、低い段を設ける。この部分と口縁外面に縄文を施した後、口縁端部上面に粘土紐を貼り付け、内外両方向からこの部分にいわゆるΣ状の密な刻み目を施す。刻み目を欠くものは刻み目を施す工具によってナデられたものである。体部の文様は幅広の扁平刻目突帯と、いわゆるΣ状の密な刻み目をもつ断面三角形の突帯が併用される。底部は数カ所に凹みをもつ。」(『兵庫県の考古学』より)

この分類によって阪神・淡路地域の縄文前期土器の研究は大きく前進したといえる。

この時期に東大阪市布市町で、体長11~14メートルのマッコウ鯨の化石骨が発見され、5040±130 B.P.の数値が得られている。これは河内湾の存在したことを示すものでもある。

縄文中期は青森市小牧野環状列石をはじめ東北地方を中心に環状列石墓がみられ、長野県八ヶ岳山麓を代表とする中部地方・関東地方に豪華な装飾文をもった土器や大型打製石斧・スリ石・石皿などが多量に検出される時期である。しかし、この時期の大阪湾沿岸の遺跡は様相を異にする。大阪府・兵庫県ともに西日本各地と同じく遺跡の発見例は少ない。食料の確保が生活の中心であつたらしく、寝屋川市讃良川遺跡では堅果類・貝類・獣類の貯蔵穴(大きいのは径2.1メートル・深さ1.3メートル)が4ヶ所発見されている。

兵庫県では姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡で船元Ⅳ式・里木Ⅱ式土器がみられ、龍野市片吹遺跡では平Ⅲ式・平ⅠⅠ式があり、瀬戸内や日本海沿岸地域との交流のあったことを示している。阪神間では伊丹市大阪空港A遺跡から勝坂式類似(東日本系)の土器、同有岡城跡下層から新崎式(北陸式)の土器、豊中市原田遺跡からは船



星田旭遺跡出土のキャリパー式土器

縄文中期の土器 (『大阪府史』・第1巻より)

元Ⅱ式(瀬戸内系)がみられる。他に芦屋市山芦屋・月若遺跡(北白川Ⅲ式)や神戸市名倉遺跡がある。淡路島でも遺跡は激減している。

大阪府下では大阪市宰相山遺跡(船元式)、岸和田市箕土路遺跡(半截竹管が主)、葛城山頂遺跡(船元式)、岸和田市春木八幡山遺跡で少量の遺物が発見されている状況である。

しかし、食用木の実の貯蔵穴や魚骨の遺存からみると、漁業と採集が併用されていた時期とみることができる。

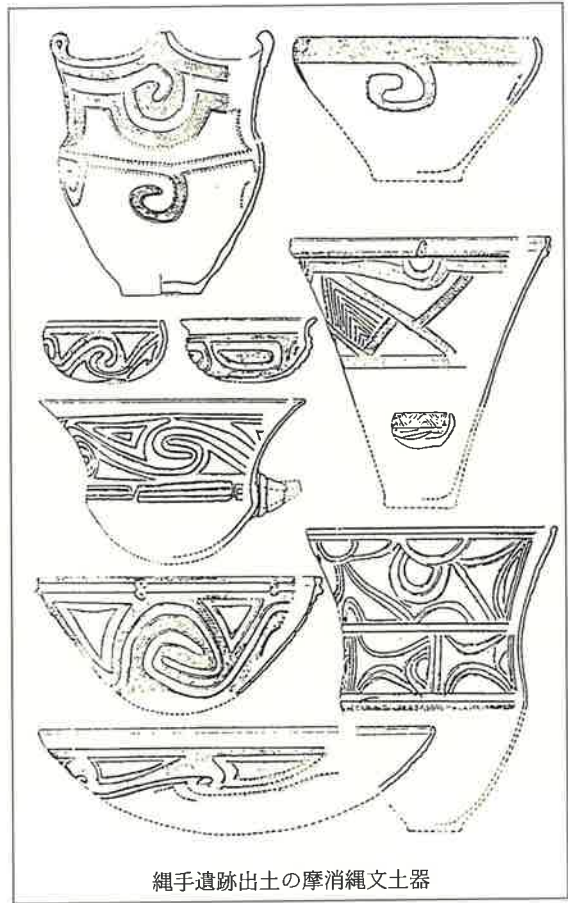
縄文後期になると、大阪湾沿岸では中期とは全く異なって遺跡が増加する。土器も磨消縄文や研磨痕をもつ土器が発達しており、全国的流行に対応している。土器の器種も増加し、土瓶型の注口土器や深鉢形土器・浅鉢・皿形土器もあり、土偶も後期になって検出されている。後期後半の標式的土器(元住吉山Ⅰ・Ⅱ式)は神戸市元住吉山遺跡から出土しており、磨消縄文をもつものと、巻貝で押捺した圧痕文と巻貝を引いた条線文の土器である。現状では、兵庫県は宝塚市を除く全沿岸地域で遺跡が発見されており、川西市加茂・伊丹市大阪空港B・同森本鶴田・西宮市西宮神社遺跡などが阪神間を代表する。大阪府下でも後期の遺跡は沿岸の各地域で検出されるといえる程多い。代表的なものに

大阪市森の宮遺跡・東大阪市縄手遺跡・豊中市野畑遺跡がある。

大阪市の森の宮貝塚は厚さ約1メートル、東西45メートル以上、南北100メートル以上のマガキ主体の貝層を後期に形成している。この上に厚さ約90センチのセタジミ主体の貝層を晩期・弥生前期～中期末の間に形成しており、河内湾から河内湖への景観（海水域から淡水域へ）の変化を物語る遺構としても重要である。マガキ層からは2種の鯨とイルカ類の骨も出土している。マガキ層Bの土器は中期末・後期前半の里木Ⅲ・中津・堀之内Ⅰ・Ⅱ式・福田KⅡ・津雲A・彦崎KⅠ式の土器類を、マガキ層Aからは後期後半の西平式・元住吉山式～宮瀧式の土器類とピット・溝・屈葬人骨4体も出土している。森の宮貝塚出土土器は、畿内・瀬戸内だけでなく関東・東北・九州中南部の土器の搬入を示しており、河内湾沿岸の地理的優位性を示す最初の遺物でもある。マガキ層出土の動物にはクジラ、イルカ、スッポン、鹿、猪がみられる。

東大阪市縄手遺跡は生駒山地の扇状地端部に形成された集落址で、後期の竪穴式住居址11棟が検出されている。第4号住居址は4.6×2.8メートルの隅丸長方形の床面をもち、中央部にT字形の掘り込みがあり、径約80センチ・深さ約15センチの炉を設けており、中央部の遺構はオンドルの暖房施設ではないかという見方もある。出土土器は瀬戸内系の中津式や関東系の土器もあるが、その8割近くが河内胎土の土器である。

豊中市野畑遺跡は、磨消縄文を主とした深鉢形土器が多く、若干の浅鉢形土器をともない、底部は平底が多く、あげ底のものもあり、胎土は河内系と思われるものがかなりの量で検出されている。搬入土器は瀬戸内系の中津式が大半で、同じ瀬戸内系の福田KⅡ式も若干みられた。石器類は石鏃15、石錐2、石斧片1、石錘50、



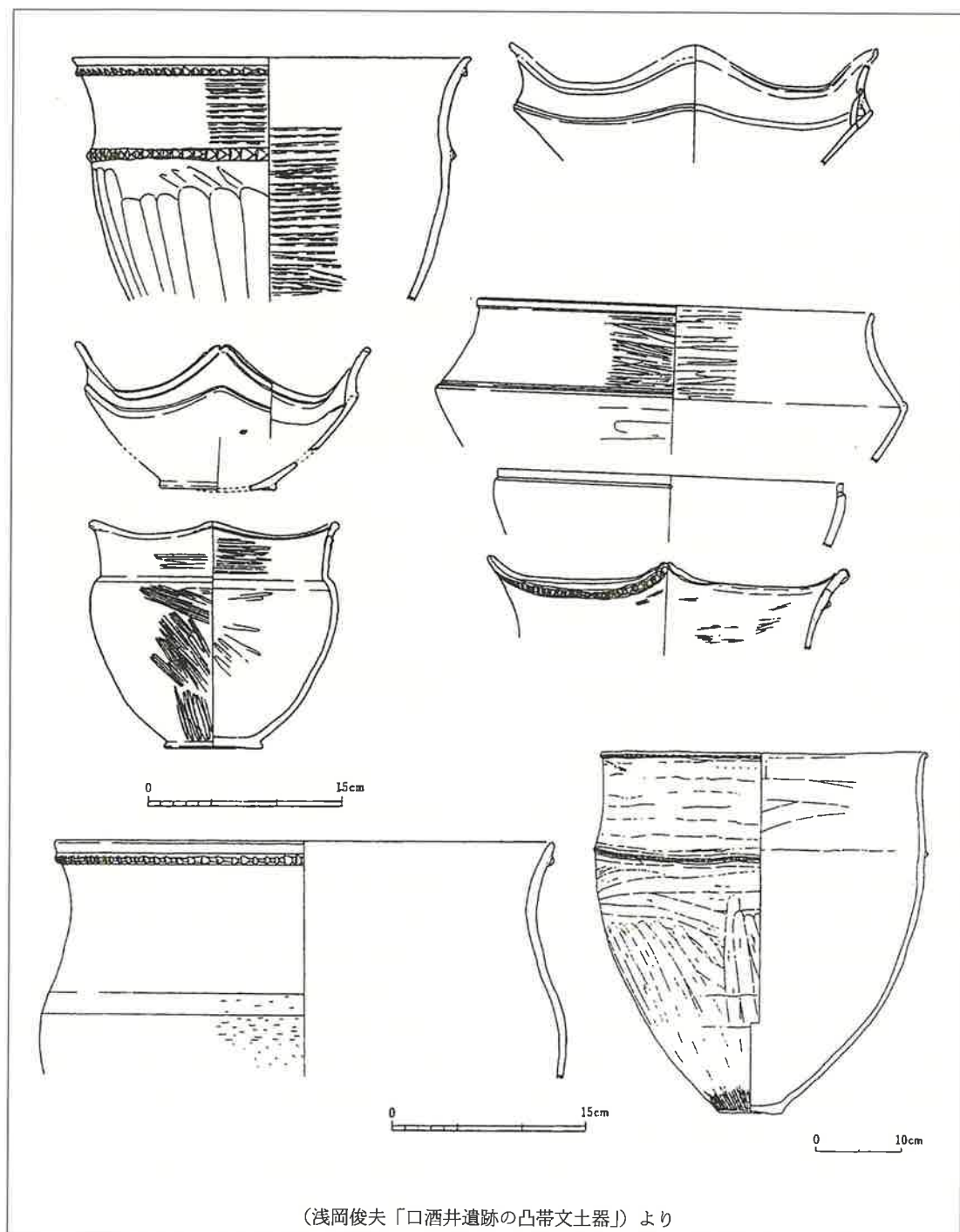
縄手遺跡出土の磨消縄文土器

縄文後期中葉の土器（『大阪府史』・第1巻より）

截断面のある石器30、叩石5、石皿状石器と凹石が主で、種子や木炭片もみられ、夏場のキャンプ的生活址と考えられている。

他に著明な遺跡としては岬町淡輪、泉佐野市三軒屋、堺市四ツ池、高槻市柱本、東大阪市馬場川、八尾市花岡山、東大阪市猪ノ木、同日夜大池、四条畷市岡山などがある。

縄文晩期の阪神間は、海退現象によって広がった沖積平野に遺跡が集中する傾向にある。大半が晩期後半の突帯文土器が主体の遺跡である。晩期前半の遺跡は表六甲山麓の神戸市篠原遺跡などである。姫路を中心とする地域でも晩期後



(浅岡俊夫「口酒井遺跡の凸帯文土器」より)

伊丹市口酒井出土の縄文晩期土器

半には海岸平野に遺跡が集中するようになる。粃痕土器を出土した姫路市今宿丁田遺跡をはじめ、辻井遺跡・橋詰遺跡・石ヶ坪遺跡などがある。橋詰遺跡では突帯文土器が弥生前期の土器と共伴して出土した可能性もある。加古川市域では、突帯文土器と弥生前期土器の共伴が確認された岸遺跡をはじめ東中・砂部遺跡、高砂市の塩田・日笠山貝塚遺跡がある。家島諸島では矢野島西部の海岸で晩期の黒土BⅠ式土器が出土している。神戸市篠原B遺跡では甕棺墓9基・集石群3と竪穴遺構が検出された。大形甕棺には人骨が遺存した。土器・石器などの遺物も多量である。川西市加茂遺跡では滋賀里Ⅳ式土器片を出土している。尼崎市の園田地域（猪名川川床・藻川川床）や田能では晩期後半の突帯文土器が検出されている。上ノ島遺跡からも出土している。阪神間を代表するのは伊丹市口酒井遺跡である。多量の突帯文土器と炭化米が同じ土坑から出土し、石庖丁・粃痕土器が出土している。山ノ寺式平行期の浅鉢にも粃痕がある。滋賀里Ⅳ式系の土器・船橋式・長原式土器が層位的に出土していて、突帯文土器を5段階に分類することができた遺跡であり、現状では近畿地方で最も古い稲作遺物を伴う遺跡の1例である。

大阪府下では、森の宮遺跡の貝層がセタンジミを主とする貝層になる時期で、現在の河内平野が海から湖に変化していく過程を示している。晩期後半の土器の標式となっている柏原市船橋遺跡（船橋式）や大阪市長原遺跡（長原式）の突帯文土器が盛行する。また晩期中葉の大洞BC式も出土している。枚方市交北城ノ山遺跡では滋賀里系の大形深鉢形土器を土坑内に斜めに立てて埋めた埋甕が3基近接して検出されている。柏原市本郷遺跡でも同様の埋甕が検出されており、東日本縄文人の風習が波及している様

相を示している。主要な遺跡には、東大阪市日下貝塚、同鬼塚遺跡、八尾市恩智遺跡、高槻市宮田遺跡、同柱本遺跡、堺市四ツ池遺跡、和泉市池上遺跡などをあげることができる。北九州では、佐賀県菜畑遺跡で稲作水田址が検出されている時期である。

数千年以上の期間にわたると考えられている縄文時代にも、石器や原材・陶土（縄文前期にも河内の陶土が但馬まで運ばれている）・装飾品の硬玉や貝輪・朱など全国的規模で交易・交流がおこなわれていた痕跡をみることができる。青森市の三内丸山遺跡が盛行していた頃（5000～6000年前）は、中国の黄河流域では竜山文化期・長江流域では石家河文化・良渚文化期の時期で、手工業生産が進展して専業化の方向に向かい、銅器・土器・漆器・木器・絹製品が生産され、戦争にともなう武器の革新や、城と城壁の築造痕跡がみられ、貴族集団の存在が知られる時期である。江西省万年県仙人洞では9000年前の土器も検出されている。この時期には湖北省枝城・湖南省澧県澧頭山では、多量の炭化米や粃を陶土に混入した土器も出土している。朝鮮半島では大同江流域や漢江・洛東江流域の文化が進展しており、アムール河流域でも東西文化の交流がみられるのが三内丸山遺跡の時期である。

文物の交流を通じて、東アジアという世界の中で、互に情報を得ていた可能性がある。縄文遺跡出土の遺物は、この時代が孤立した社会では無かったことを示している。

4. 弥生時代

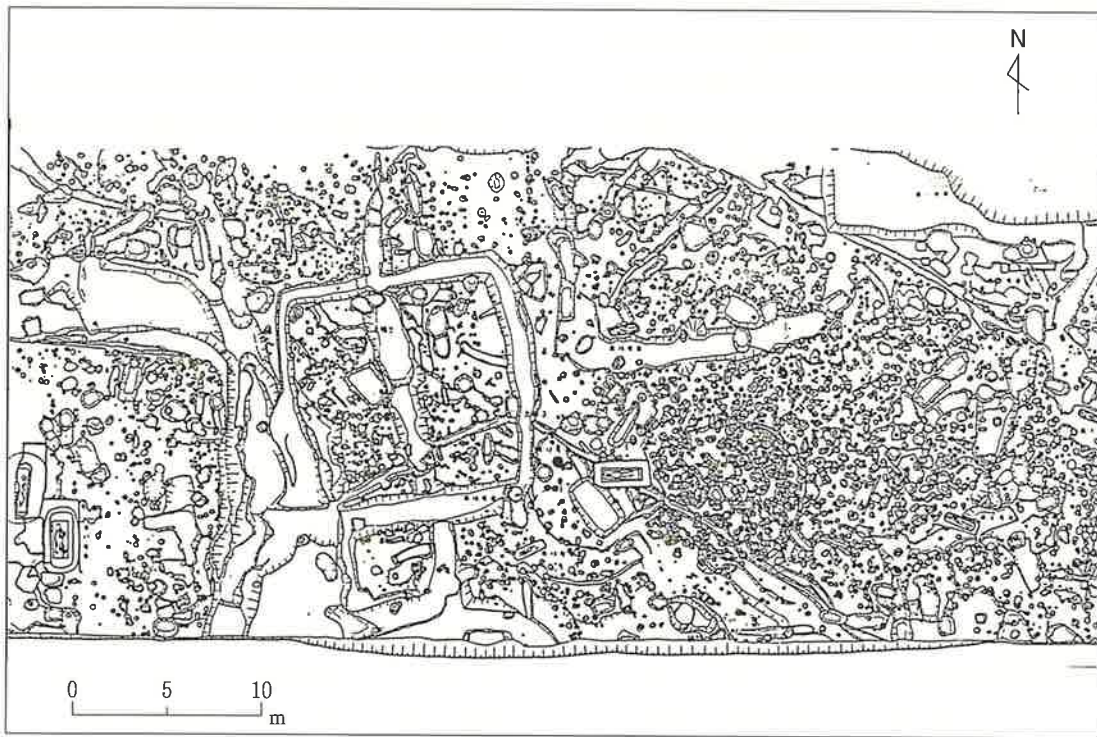
西暦紀元前4世紀から紀元後3世紀頃の時期で、目安としては早期（B.C.4～3世紀）・前期（Ⅰ様式・B.C.3～2世紀）・中期（Ⅱ様式・B.C.2世紀）・中期（Ⅲ様式・B.C.1

世紀)・中期(Ⅳ様式・A.D.1世紀前後)・後期(Ⅴ様式・A.D.1～2世紀)・終末期(Ⅳ様式・A.D.3世紀前半)に大別されているのが現状である。弥生時代の遺跡は大阪湾沿岸の全域で濃密に検出されており、縄文時代の遺跡にくらべると爆発的に増加する。金属器と農耕の技術をもった渡来人大集団の来住によるという説、大陸・朝鮮半島の政情の変化と連動しているとする説、縄文人が安定した食料資源を得たことによる自然増大という説など、現在の日本人の源流ともかかわる問題ともなっている。

稲作農耕の伝播についても、既に縄文後期以後にはその徴候がみられるし、交易や交流によって、東アジア各地域の情報は入手していた地域があったことは当然考えられる。しかし、中国の揚子江中流域一下流域-淮河流域-黄河中流域一下流域-山東半島-遼河流域-大同江流域-

日本海沿岸説、揚子江下流域-東シナ海-朝鮮半島西南部-北九州説、揚子江下流域-華南地域-沖縄-九州説などで、稲作農耕の波及についても、主流・支流を含めて多くの説が出されている。ともあれ、弥生前期には水田農耕が佐賀県菜畑から青森県砂沢まで波及していることは事実である。拠点の母村集落を中心に前期・中期・後期と継続的に発展している遺跡もあるが、前期末や中期末で姿を消す集落遺跡も多量検出されている。

集落遺跡を代表する神戸市玉津田中、尼崎市上ノ島・田能、和泉市池上曾根、大和川川床の柏原市船橋、貨泉を出土している東大阪市巨摩寺・貝塚市沢・八尾市亀井・大阪市瓜破、カンザシを出土した高槻市安満、青銅器や木棺の東大阪市瓜生堂・大阪市長原、大型墳丘墓の大阪市加美、方形周溝墓と遺存のよい木棺の四条畷



尼崎田能遺跡第4調査区

市雁屋・豊中市勝部・池田市宮之前・八尾市山賀、銅鐸をはじめ青銅器鋳型で有名な茨木市東奈良・東大阪市鬼虎川・尼崎市田能遺跡など、弥生社会の変移の状況を示す遺物・遺構は全国的にみても豊富で先進的である。尼崎市田能遺跡は近畿地方ではじめて方形周溝墓・有椁式土坑墓・組合式箱式木棺墓・木蓋土坑墓・蔽い口式甕棺墓・壺棺墓など墓葬の各形式と男女の完形人骨を検出した学史上でも重要な遺跡である。

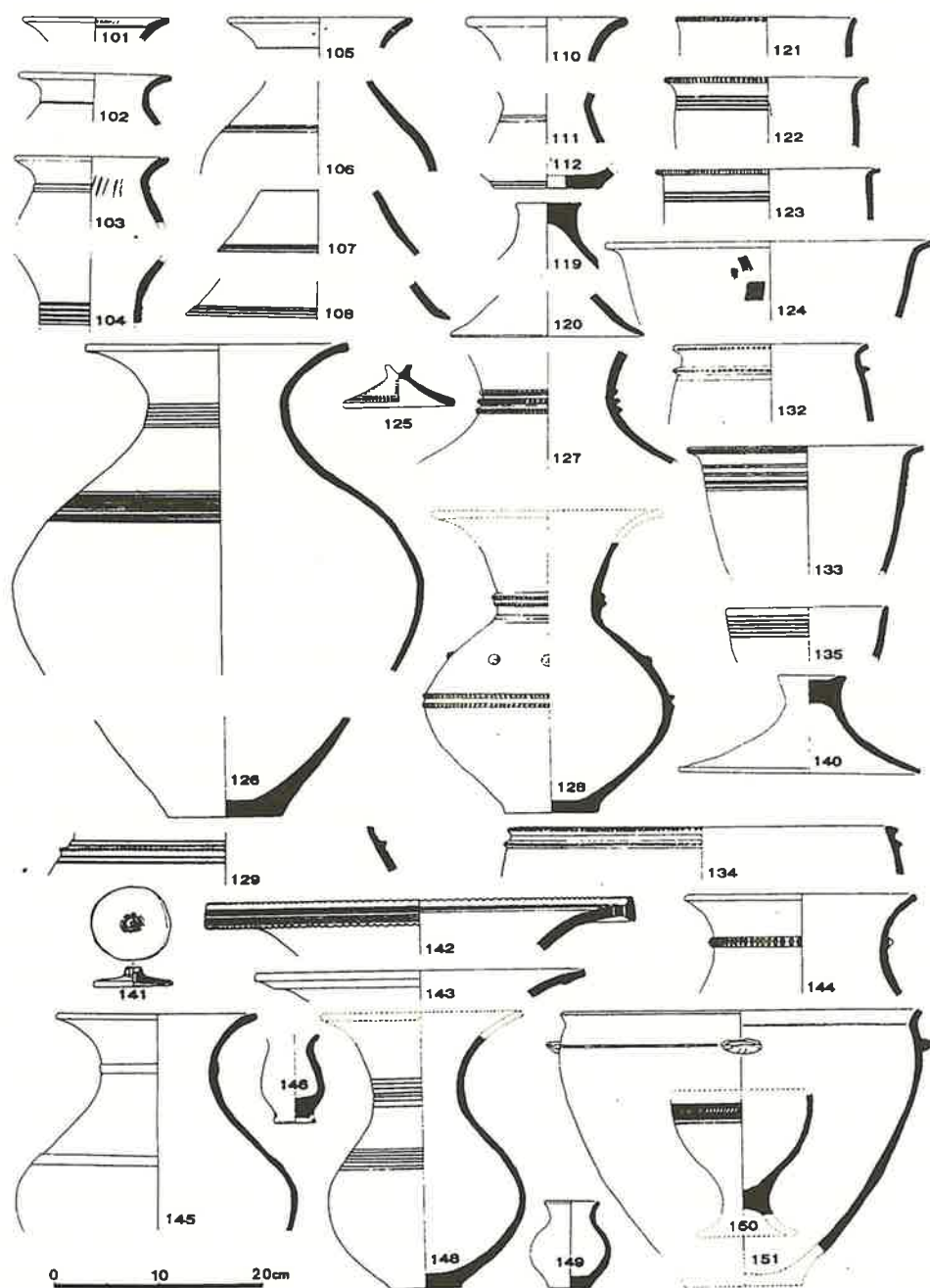
(1) 弥生前期

兵庫県下では、伊丹市口酒井遺跡で、滋賀里IV式系の浅鉢（北九州の山ノ寺式併行）に粘痕がみられ、船橋式突帯文土器と炭化米が同じ土坑から検出されるなど、滋賀里IV式・船橋式・長原式縄文晩期の時期に稲作文化と共存していることを示している。また、終末期縄文土器には生駒山西麓の胎土の土器が多量にみられる。石器からは、あくまでも縄文人の社会の石器構成であり、弥生文化に属するものは石庖丁と前期I様式の弥生土器だけである。したがって、縄文晩期後半に稲作農耕文化と接触が始まったことを実証する遺跡として重要である。神戸市大開遺跡では長原式土器と弥生前期I様式の土器が共存し、弥生前期前半の環濠集落を構成している。神戸市北青木遺跡でも弥生前期前半の集落遺構が検出されているが、河内の土器が1割を占めている。神戸市戎町遺跡では弥生前期の水田址36枚が検出され、農耕具貯蔵坑も発見されている。尼崎上市ノ島遺跡では多量の農耕具・建築用材・織機具や容器を含む木器・果実と種子類・石器各種が発見されたが、弥生前期だけで終わる遺跡である。文化財保存の先駆的役割を荷った尼崎市田能遺跡は弥生全期を通じて発展する拠点集落で、防水用の大規模な環濠をもつ。このように、阪神間の弥生前期遺跡は、

縄文晩期終末期の時期以来、共存しながら水稻農耕の社会を形成していったことを示すとともに、生駒山西麓の土器が多量に検出されることを特徴とする。

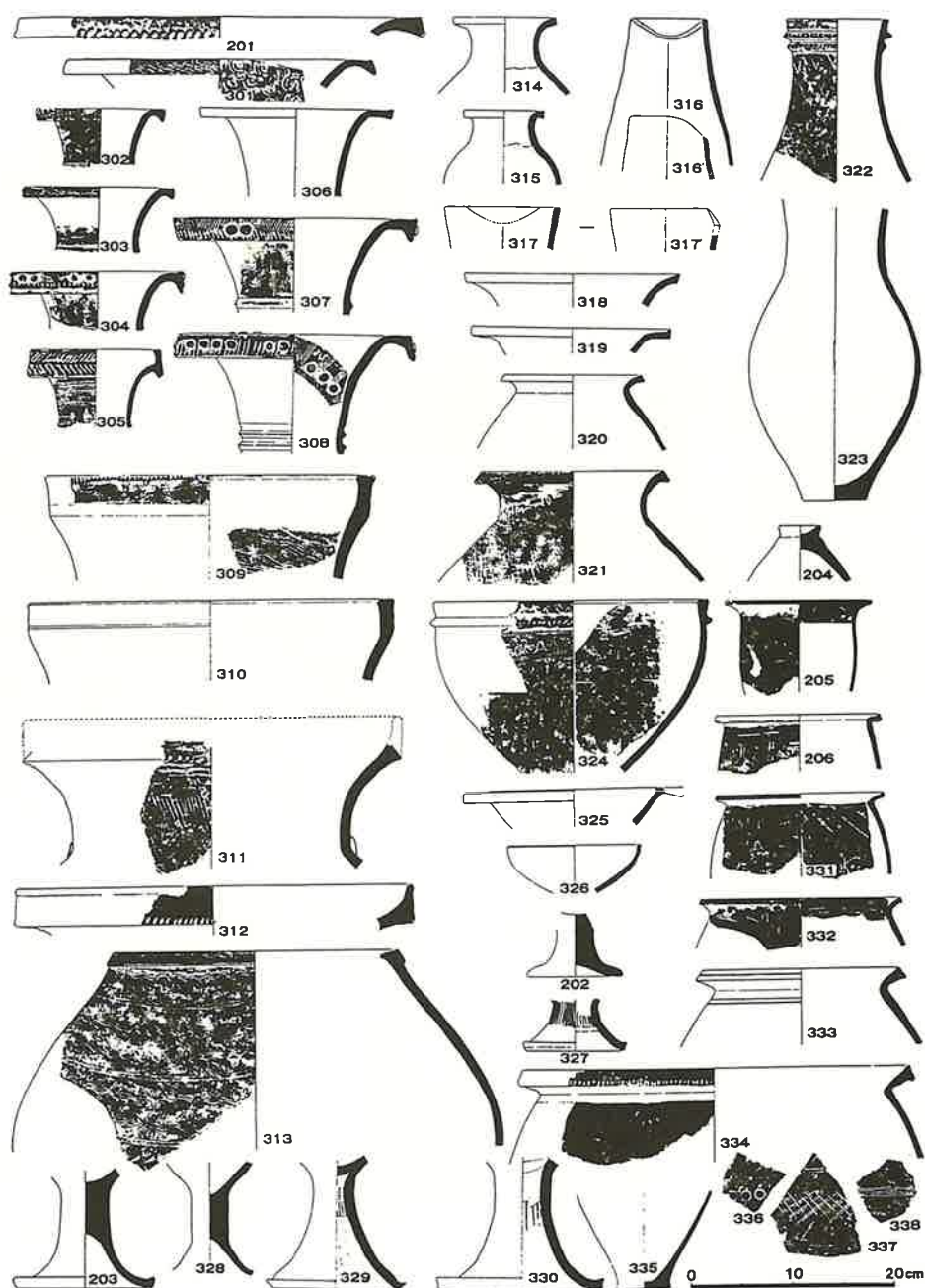
大阪府下では、高槻市安満遺跡が周知されている。ここでは粘痕土器を含む縄文人の集落が北側のやや高い所に、南側の低い地域に弥生人の集落が営まれたらしく、水路や水田址も検出されている。縄文人は従来の生活手段を継続しながら弥生文化と接触していたらしい。縄文文化期以来、河内の土器は安満以外にも河内周辺の各地域から大量に検出されるので、河内の生駒山地西麓地域は土器の生産と供給の基地であった可能性もある。安満遺跡からは鍬・鋤・織機具・匙・杓子・容器・弓・櫛・朱塗りのカンザシなどの木器、水田・井堰・用水路、紅簾片岩製の玉鋸数点・方形周溝墓と木棺などが出土している。水田は前期末の洪水でかなり荒廃したことを示している。茨木市東奈良遺跡では畿内I様式期の方形周溝墓の検出があり、環濠内からは瓢箪の杓子を模した土製品・鍬・杵・木製容器類・ヤブツバキの板を円形にくり抜いた腕輪・盾状朱塗り板・猪・鹿・犬の骨などが出土している。しかし、水田・井堰は未だ検出されていない。高槻市芥川遺跡は縄文後期以来、断続的に継続しているが、弥生前期の土坑墓は50基を数えるという。郡家川西や耳原遺跡でも縄文人の集落と弥生人の集落が同じ地域に共存したことを示している。

北河内では、河内潟北岸の拠点集落とみられる寝屋川市高宮八丁遺跡がある。弥生前期の碧玉工房を示す遺物・ヒスイ勾玉・漁撈具・農耕具・石製工具・織機具・碗など容器類・弓・狩猟具などの木製品を土器とともに多量に出土している。土器には近江・播磨の土器がみられる。大東市中垣内遺跡は第I様式新段階に盛時を迎



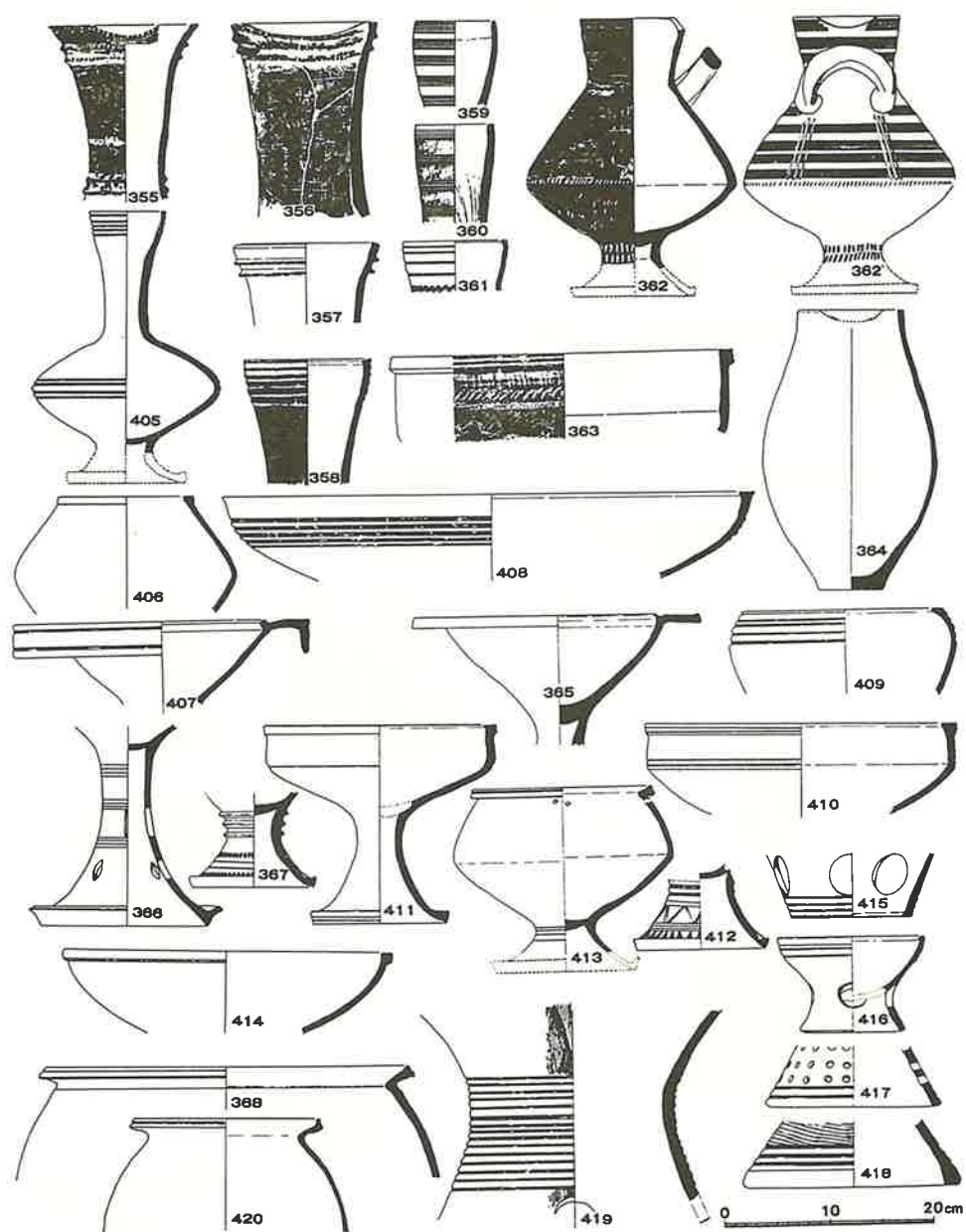
土器実測図（第Ⅰ様式）
 101～124 第4調査区・第20溝下層、125～135 同上層出土

尼崎田能遺跡出土 弥生前期土器（報文より）



土器実測図（第Ⅱ・Ⅲ様式）
第4調査区《鋳型ビット》出土

田能遺跡出土 弥生中期土器（報文より）



土器実測図（第Ⅲ・Ⅳ様式）

田能遺跡出土 弥生中期土器（報文より）

えるようである。

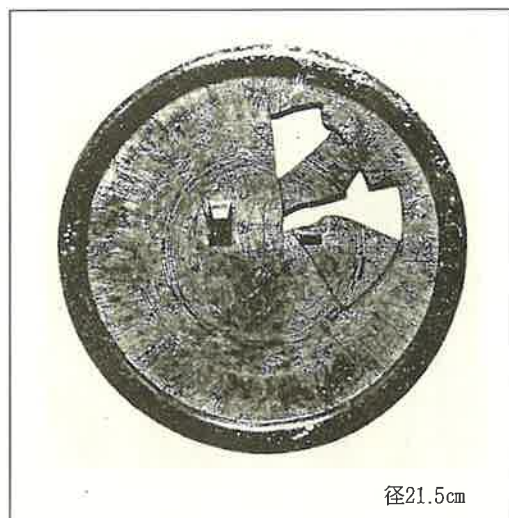
中河内では、東大阪市鬼塚遺跡で縄文晩期突帯文土器と木葉文壺を含む弥生前期土器が伴出し、火災住居址では梁に土器製作用の粘土塊を多量にぶらさげていたことを推測させる状況がみられた。東大阪市森ノ下遺跡は河内潟南端に位置し、縄文終末期と弥生前期の土器が共存して検出された。また、東西10m・南北約30m・厚さ1mの貝塚も検出されている。貝層は大半が淡水産のセタシジミ層、汽水性の大和シジミ層、海水層のハマグリ・カキ・アカニシ層の順になっていて、魚貝類採取の段階から前期後半になって農耕に移行したらしい。東大阪市鬼鹿川遺跡は生駒山地西麓最大の遺跡で、住居区・墓地区・水田区が区別されている。木製容器類・農耕具多量を出土し、平地集落へ木製品や木材を供給していた可能性もあり、木製品貯蔵坑もある。八尾市域には古段階以来、山賀・美園・跡部・八尾南・田井中・中田・大竹西など有名な遺跡があるが、山賀・田井中では明確な環濠がある。また、弥生前期Ⅰ様式中段階以後に弥生中期の遺構が重複する遺跡はみられないのが、平野部の特色である。

南河内では、巴形銅器を出土した羽曳野市国府遺跡、打製石剣の出土量の多い富田林市喜志遺跡が知られ、和泉では堺市四ツ池遺跡と和泉市池上曽根遺跡が知られている。

(2) 弥生中期

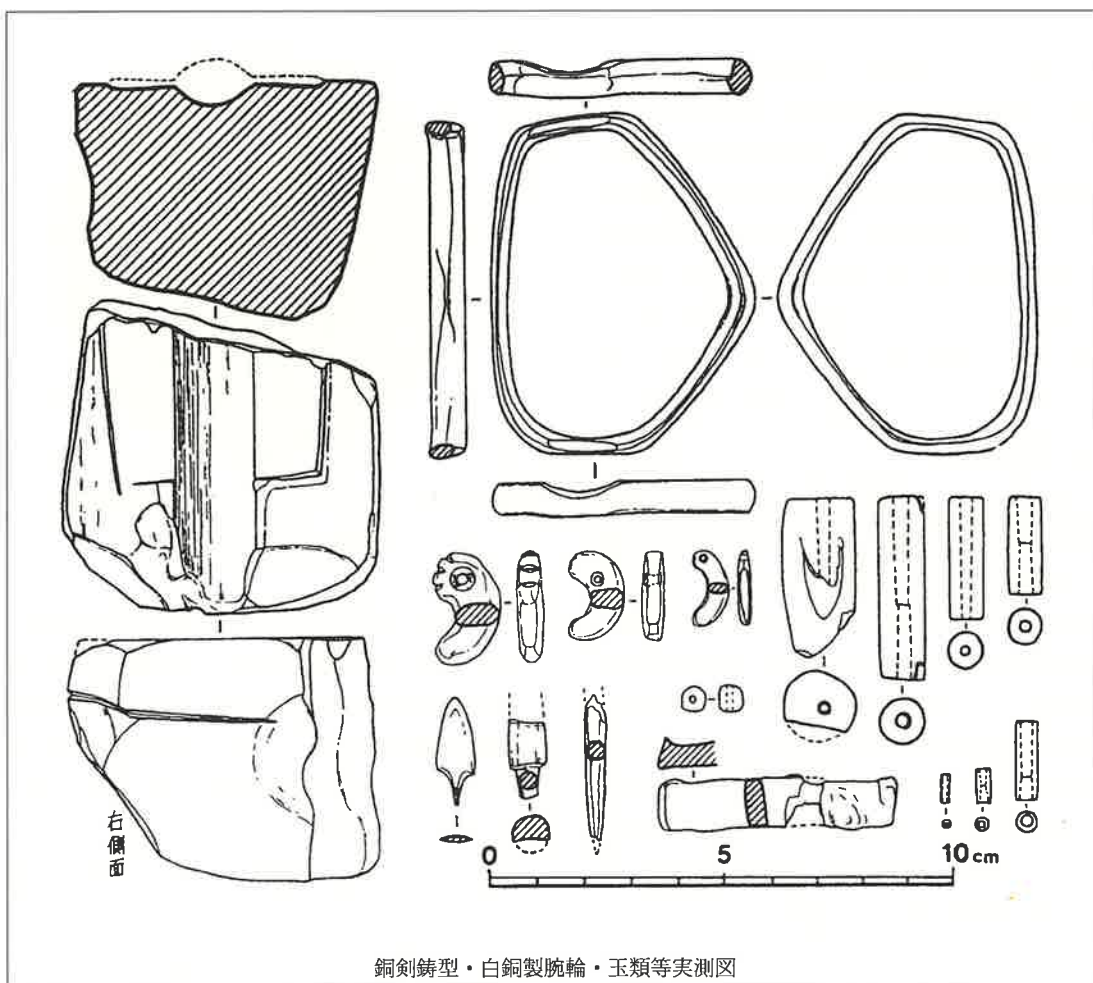
大阪湾沿岸の弥生中期遺跡は、低湿平野部・丘陵上及び周縁部、山頂式高地性遺跡と称される程の高所の遺跡に大別できる。柏原式大県からは朝鮮半島渡来の細線鋸歯文鏡（多鈕細文鏡）が出土している。

尼崎市田能遺跡は低湿地平野部（標高7m）を代表する前期以来の大集落址で、中期遺構は



柏原市大県出土 多鈕細文鏡

掘立柱跡を無数に残す高床式住居址群を構成する。中細A式銅剣鋳型やヒスイの勾玉や碧玉管玉の大小各種や多量の石庖丁・石器各種や砂岩製銅剣鋳型が出土している。豊中市勝部では腰骨に石槍を打ち込まれた遺体を葬った木棺墓があり、中期に戦乱のあったことを示している。丘陵上の川西市加茂遺跡では中期に首長館と思われる遺構の一部を検出しているし、魚をはじめ若干の絵画文をもつ土器も検出されている。神戸市楠荒田町では40基以上の円筒状貯蔵穴が発見されている。土器からみると、中期初めまでは播磨の影響があり、中期後半には摂津独自の土器となる。生駒山地西麓の土器も前期～中期初には搬入されているが、煮炊器の甕は無く、容器の壺・鉢だけであり、何等かの物資が運ばれた可能性もある。紀伊・和泉・淀川北岸の複合櫛描文土器の搬入も中期にみられる。伊丹市西野遺跡は弥生中期Ⅳ様式のみ集落遺跡である。高槻市安満では150基以上の方形周溝墓が検出され、北摂型広口壺・複合櫛描文土器・摂津型水差なども出土している。高槻市天神山からは突線鈕Ⅱ式の銅鐸、伝清水村では突線鈕Ⅴ



尼崎田能遺跡出土遺物（報文による）

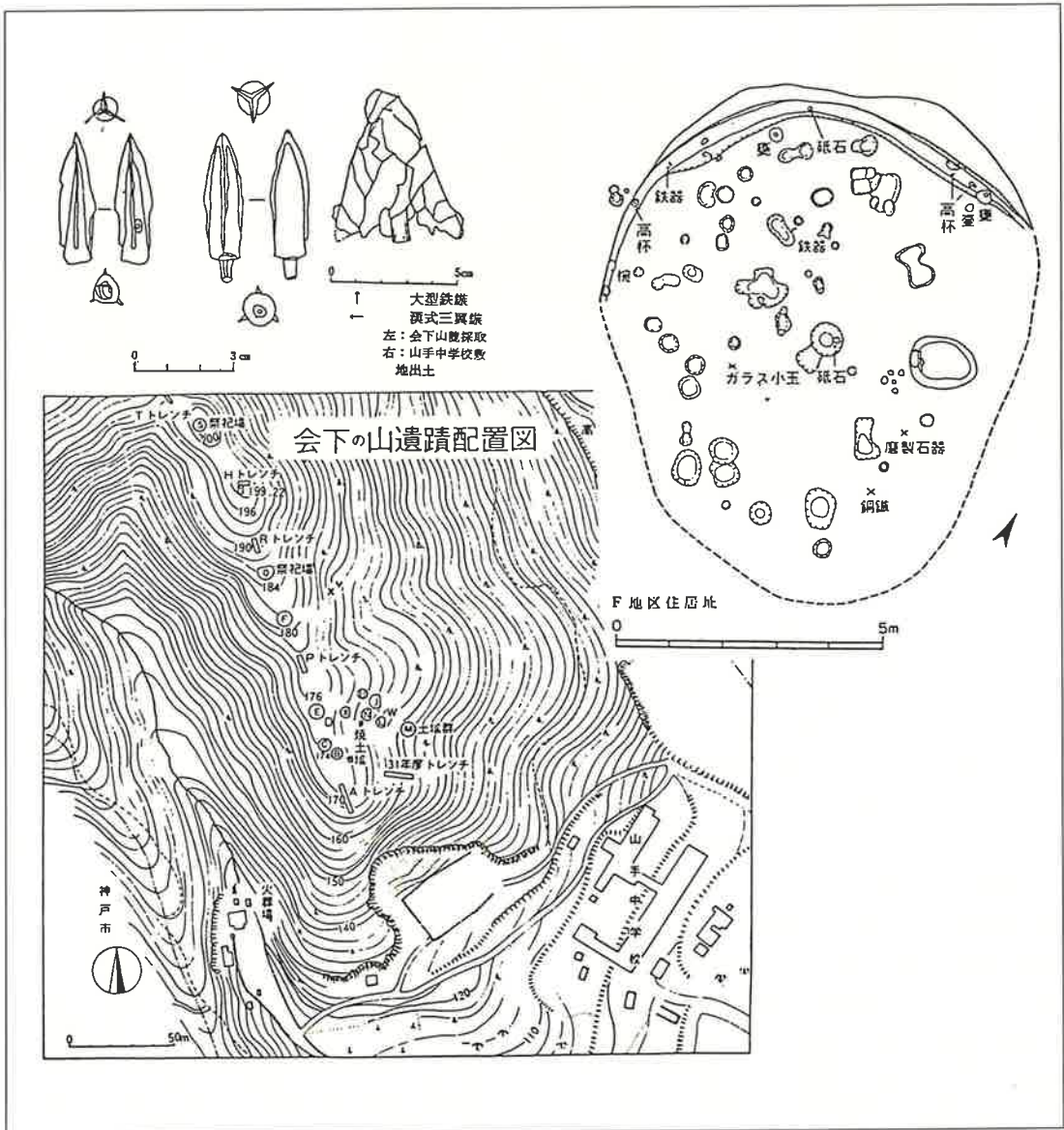
式の銅鐸が出土している。また、芝生からはチャート製アメリカ式石鏃（東日本特有）も出土している。北河内の枚方市交北城ノ山では42基の方型周溝墓が検出されているが、集落はⅡ様式期にはじまりⅢ様式期には廃絶する。守口市八雲遺跡はⅠ様式新～Ⅱ様式期に出現し、中期前葉で廃滅するためⅢ様式土器は出土しない。竪穴住居址内から赤色ビーズ玉・碧玉管玉及び未製品・鉄石英・メノウ・サヌカイト製玉造り工具・砥石のほか摂津系土器・木器・各種石器を出土している。分析結果では、金山産サヌカイト、

高島産粘板岩、沼島産紅簾岩、佐渡産鉄石英の搬入が判明している。四条畷市雁屋遺跡からは、コウヤマキ・ヒノキ・カヤ材の木棺、鳥形木製品、木製四脚容器と蓋・銅鐸の舌状石製品などが検出されている。中河内では亀井・城山・鬼虎川・西ノ辻・巨摩・瓜生堂遺跡が大規模遺跡で、八尾市亀井では九重以上の防水用環濠がみられる。丘陵上の枚方市田口山遺跡では40棟以上の竪穴住居址、土壇などが出土している。寝屋川市太秦遺跡も海拔50mに位置し、Ⅱ様式期には摂津の土器、Ⅲ様式期には生駒山地西麓の

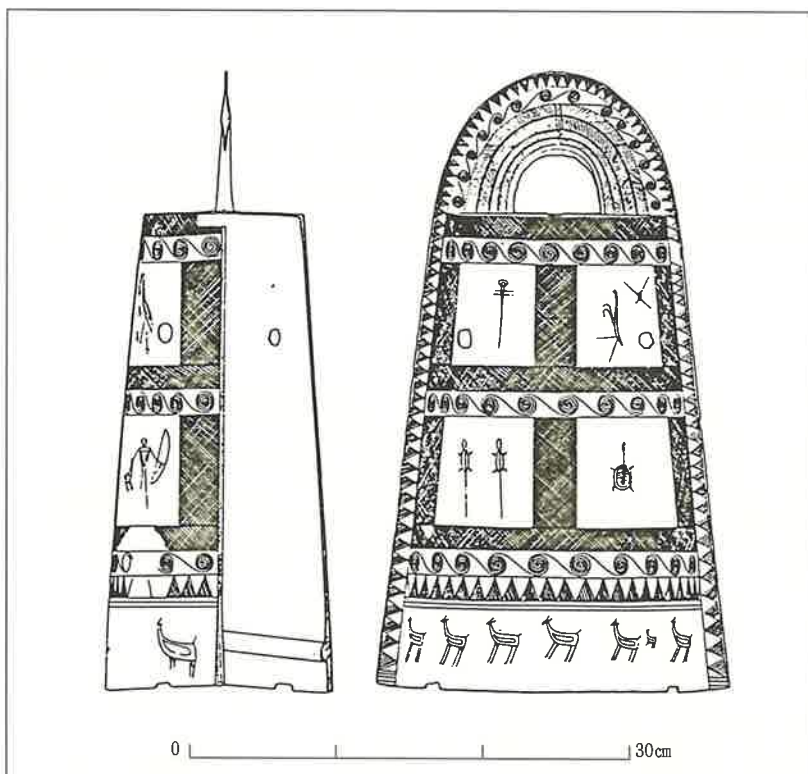
土器がみられる。東大阪市西ノ辻遺跡の各地区出土の土器は中期末から後期にかけての河内地方の基準土器となっている。和泉市池上曾根は中期に拡大し、大量の遺物を出土している。しかし中期中葉に環濠は埋もれ、新しく外側15m程のところに掘られた環濠も中期後半には機能

を失なったと考えられる。

中期に出現する高地性遺跡では、標高200mの芦屋市会下山遺跡が完掘された遺跡として全国的にも重要である。山頂部に住居址16以上、高床倉庫1、物置址、屋外炉址、石組、祭祀場址2、土墳墓4以上、柵址、廃棄場址、泉址な



芦屋市会下山遺跡（報文による）

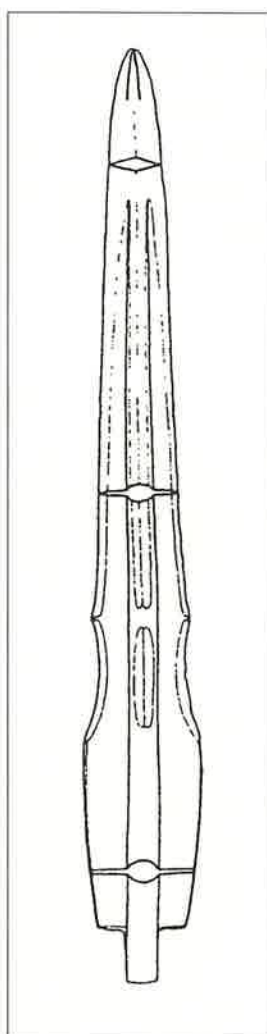


神戸市桜ヶ丘銅鐸（第4号鐸）

ど集落を構成する諸要素が全て明らかにされた。首長住居だけが炉をもち、柵で一般住居と画され、上方に祭祀場2ヶ所を保つ。磨製石鏃・銅鏃・舶載鉄斧・釣針・鉄工具類・漢式三翼鏃などのほか、石鏃・大型鉄鏃・石錘・石（投）弾・刃器・柱状片刃石斧・磨製石剣・砥石・丸石・叩石・ガラス小玉などが出土しているが、大型蛤刃石斧や石庖丁はみられず、軍事的緊張のもとに設営された集落とみられる。大阪湾沿岸地域は青銅器の出土量の多い地域で、銅鐸・銅剣・銅戈・銅鏃・貨泉・銅鏡・巴形銅器・銅釧など多様である。各種青銅器を铸造した鋳型の出土も播磨・摂津・河内の地域にみられる。巫女が使用した可能性もある破鏡は、前漢鏡が八尾南・神戸市森北町で、後漢鏡が播磨町大中・八尾市亀井・高槻市芥川などで出土している。銅鐸は

神戸市桜ヶ丘の銅鐸14・銅戈7の出土、淡路島古津路の中細B式銅剣14の出土が特筆に値するが、出雲を除けば、大阪湾沿岸が青銅儀器・武器の出土量は最も多い。

弥生中期末に一つの画期があったらしく、前期以来の、また中期に発生した弥生集落の廃絶が目立つ。戦乱と関係があるかも知れず、後期に向けて更に拡大する拠点集落も見られる。尼崎市田能などがその例となる。700個ほどの碧玉製管玉を身に着けた（17号棺）人・無鉤の白銅製釧を左腕にはめた（16号棺）人は朱詰めの特大の大型木棺に葬られており、明らかに首長夫妻墓である。現状では、この2棺が最大であ



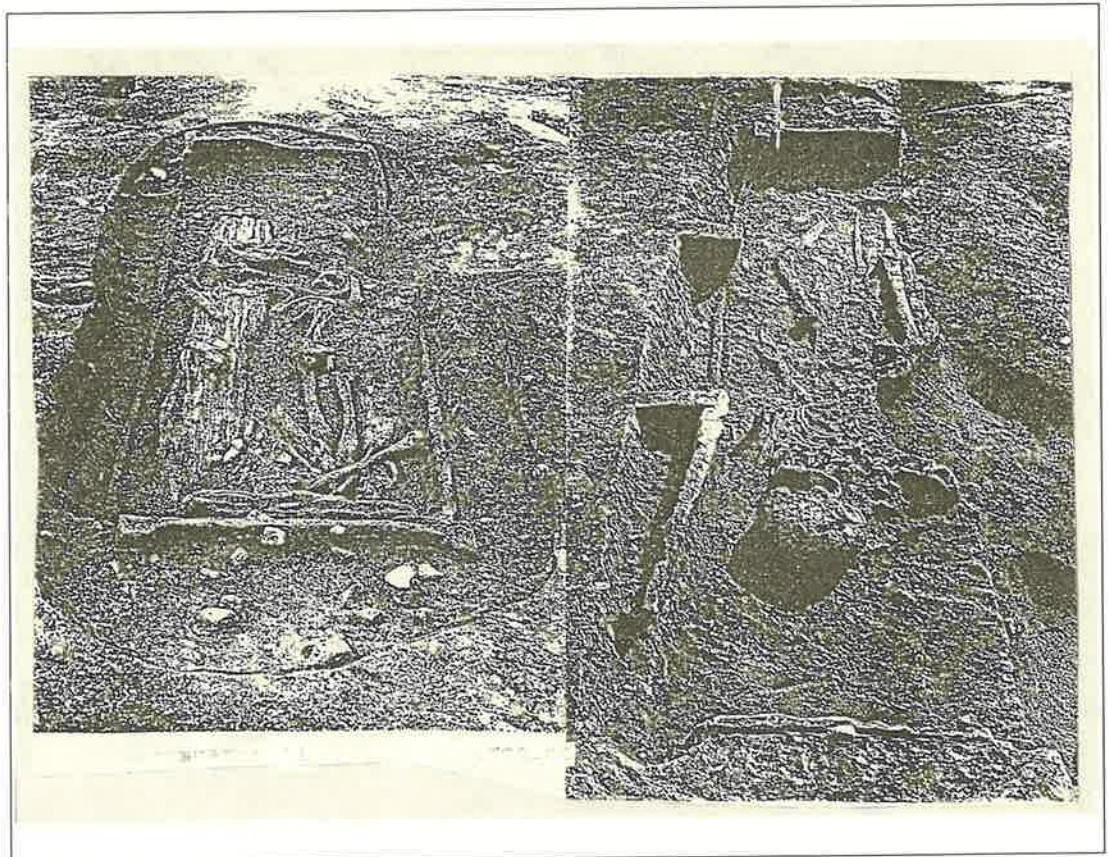
淡路古津路出土、銅剣

る。中期の戦乱を乗切った集落の指導者であろう。

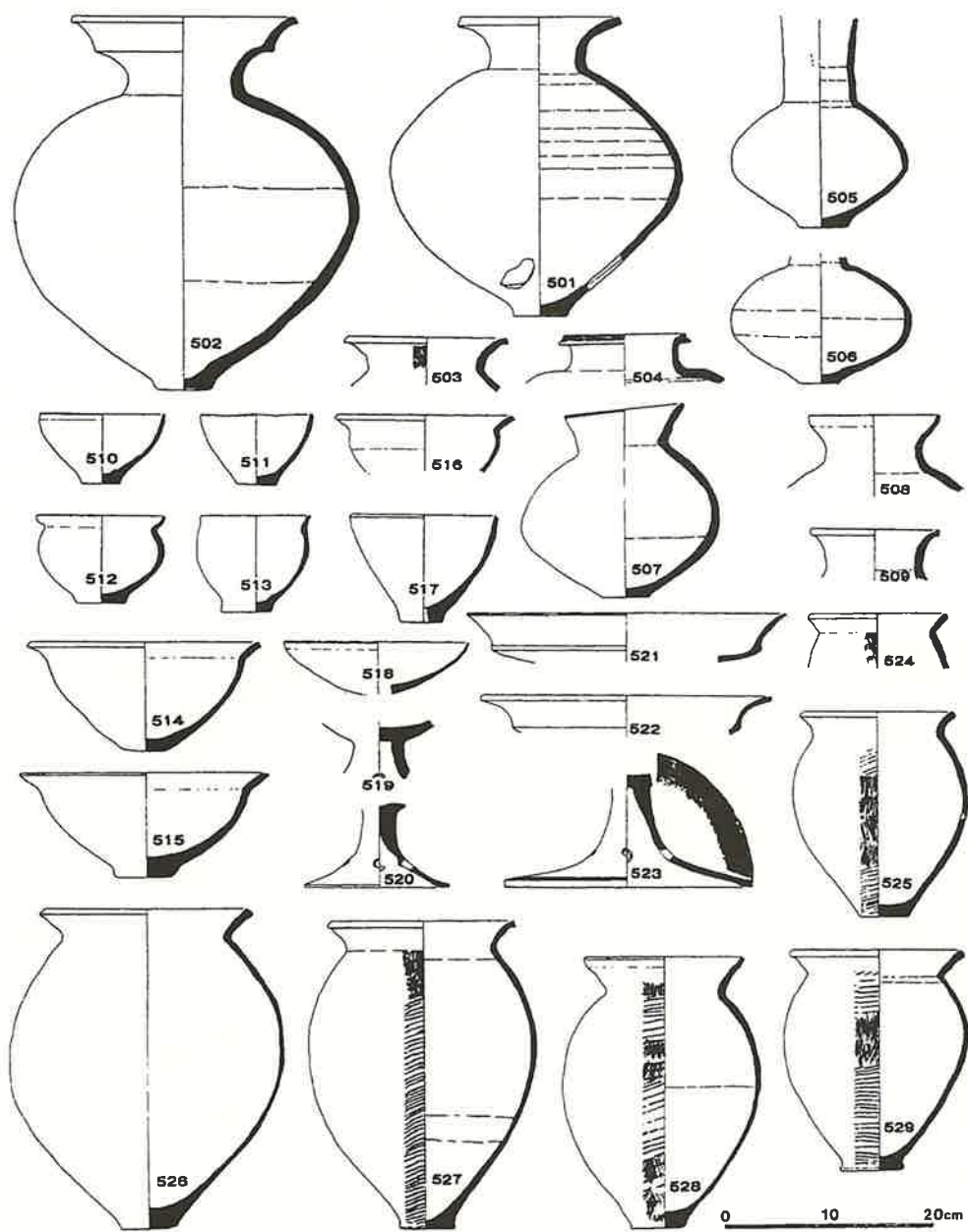
(3) 弥生後期

大阪湾沿岸地域の大部分が遺跡と云ってよい位に遺跡量が増大する時期である。田能からは19基の木蓋土墳墓・箱式木棺墓・土器棺墓が、近畿ではじめて人骨とともに検出され、方形周溝墓もはじめて発見された。中期までの集落が廃絶または縮小するのに対し、この遺跡は規模を維持して首長墓を遺存している。田能の人骨は全て伸展葬で、男性は両手を両サイドに、女性は両手を胸の上で組んでおり、壺棺・甕棺は乳幼児骨が納められていた。土器の出土量も多

く、近畿弥生土器の編年に大きな寄与をした。鯨の第3肋骨の一部、鹿の角・歯・骨、猪の歯・骨、鳥骨、魚骨と歯、貝類、炭化米、炭化粉、果実・種子、木製砦、弓、鋏、杵、夫々長さ3mの建築用材、木杓子、ガラス玉、各種石器など遺物も多量である。高槻市古曽部・芝谷では最大幅8m・深さ4m・4万㎡をはかる大環濠が遺存し、六角形住居址から後漢の方格規矩鏡片が出土し、安満を拠点集落とする時代ではないことを示している。枚方市田口山ではV様式期の鉄鏃5・鉄剣など14点の鉄器が検出されている。長尾西では播磨（大中遺跡の六角形住居は典型である）に多いベッド状高床部が住居址内にみられ、渚遺跡ではV様式に近江系土器が

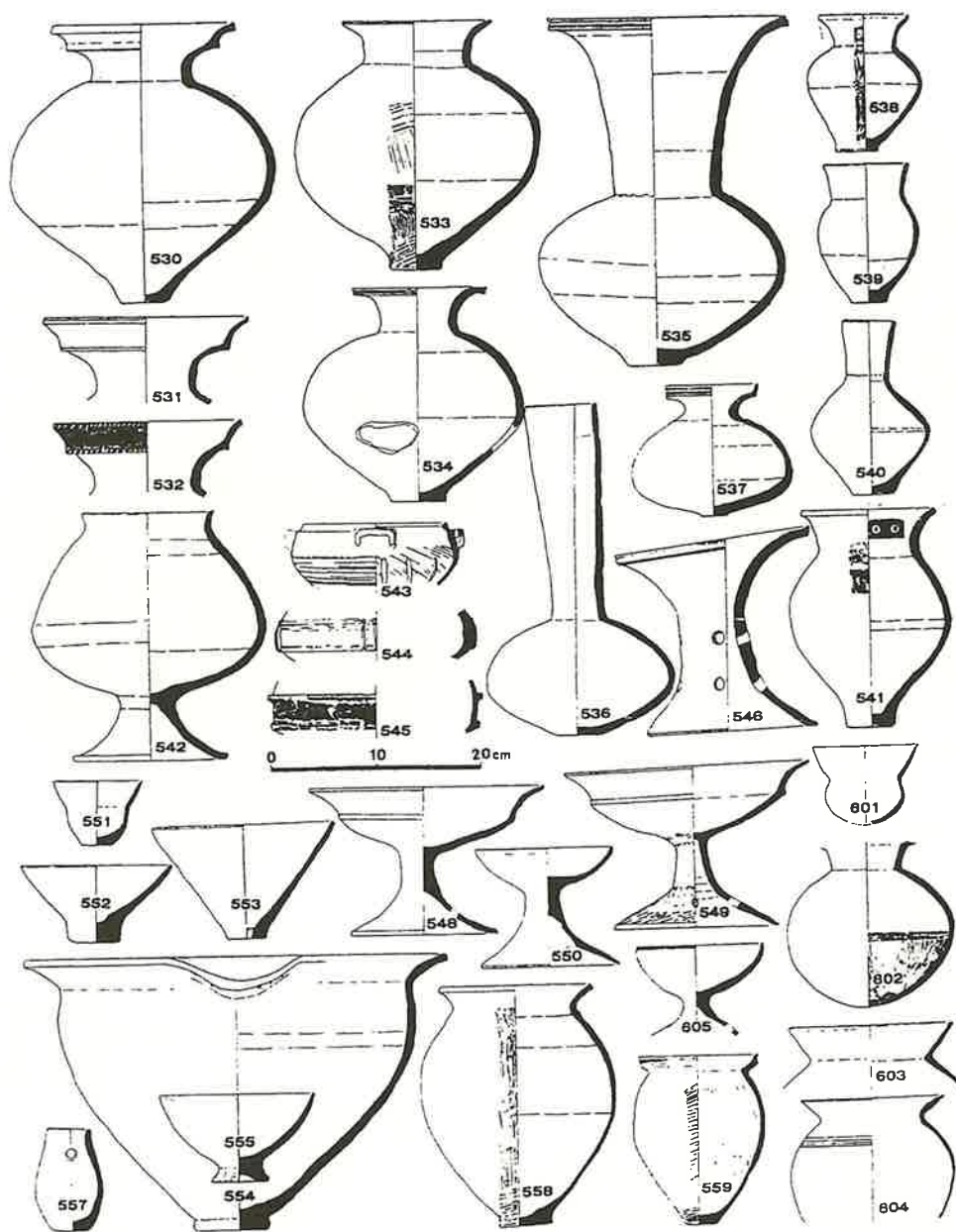


尼崎田能出土の大型木棺（左が17号棺・右が16号棺）（報文より）



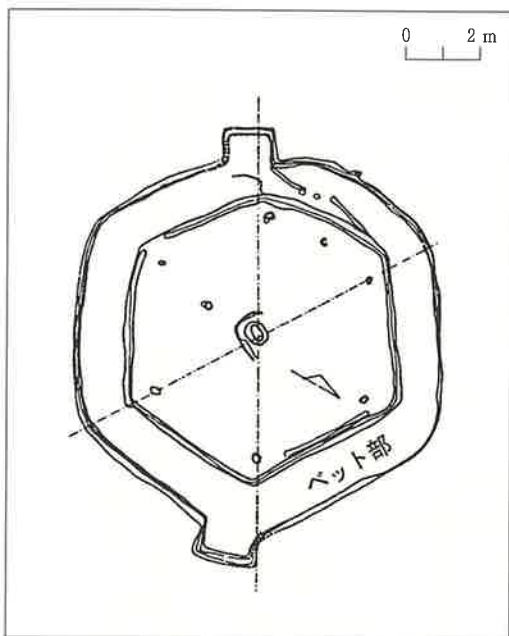
土器実測図（第Ⅴ様式）
第6Ⅴ調査区 第2溝出土

田能出土の後期土器（報文より）



土器実測図（第Ⅴ様式・土師器）

田能出土の後期土器（報文より）



播磨町大中遺跡の六角形住居址（報文より）

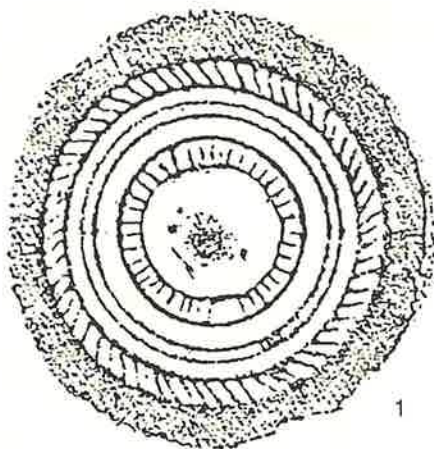
含まれている。鷹塚山遺跡は海拔65mのV様式から終末期にかけての遺跡であるが、径7cmの小形仿製鏡、分銅型土製品、球状土製品、皮袋形土器、手培形土器、銅鏃、鉄鏃など10余点の鉄器、砥石などを出土している。山之上天堂では六角形住居址、ベット状高床部が検出されている。藤田山では竪穴住居30棟以上と近江系土器が出土している。交野市南山は生駒山地の海拔215mに位置し、V様式期の信号所と推測されている。門真市大和田からは表土下2mで銅

鐸3個が発見された（1号は無文・2・3号は4区画袈裟禪文）。四条畷市砂山でも6区画と4区画の袈裟禪文銅鐸2個が出土している。東大阪府池島では弥生後期の水田址が検出

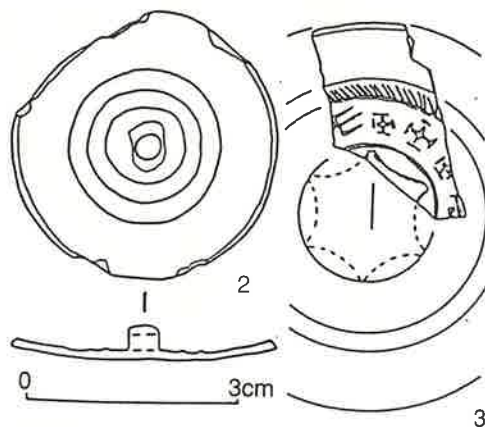


伊丹市宮之前出土の青銅製釣針（伊丹市教委提供）

された。河南町寛弘寺では小銅鐸が、羽曳野市西浦では銅鐸が1個出土している。柏原市平野の犬を浮彫りにした絵画土器は珍しい。泉大津市要池では有鉤銅釧が出土している。和泉市観音寺山は海拔65mで、100余棟の竪穴住居址、鉄鏃、投弾、鉄刀子、鉄斧などが出土している。和泉地域の遺跡からは漁撈と製塩を特色とする地域であったことが推測される。生駒山西麓では西ノ辻・馬場川・山畑・鬼塚・上六万寺・北鳥池・花岡山・大竹・太田川・大泉・水越・恩



（実大）拓本



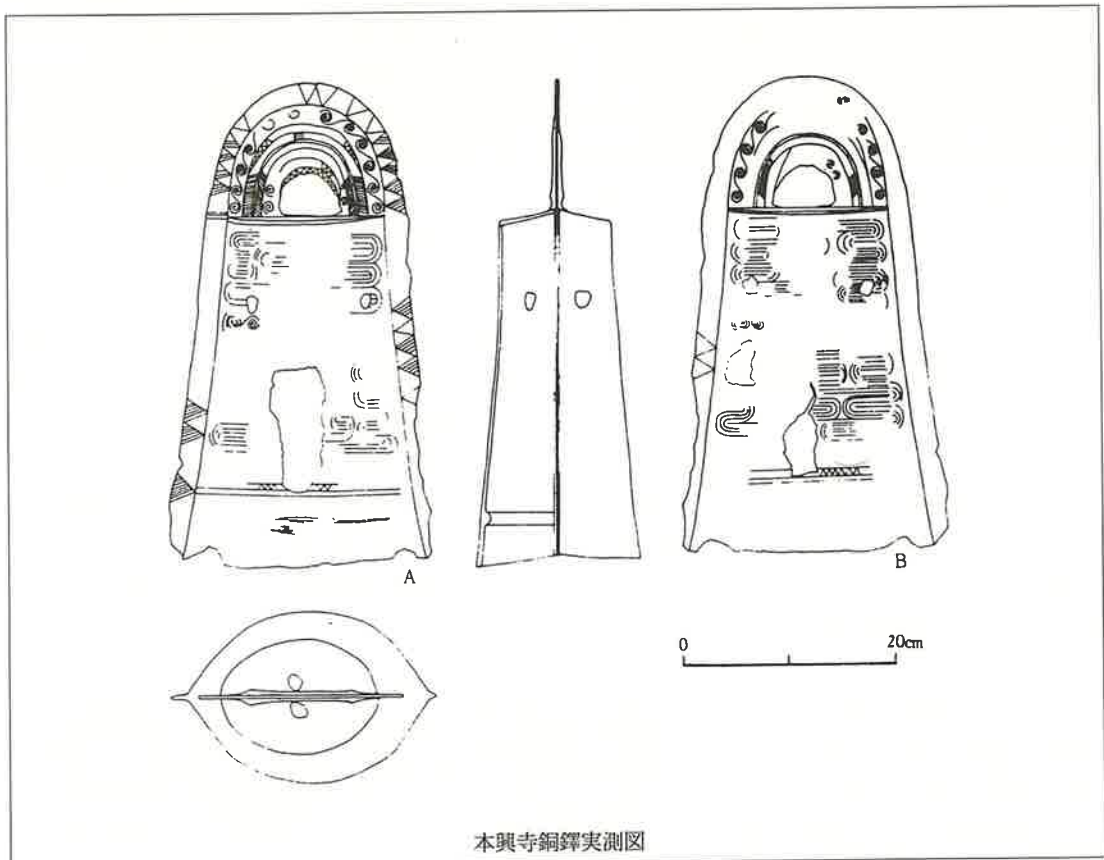
小型仿製鏡

1. 枚方市鷹塚山出土
2. 尼崎市下坂部出土
3. 八尾市八尾南出土

智などの遺跡が後期にも生活の場となっている。瓜生堂からは貨泉、萱振からは銅剣片、亀井からは銅鏡・銅鐸片2・銅釧・貨泉が、瓜破からは銅鏡片3・貨泉2が、八尾南からは銅鏡片、高尾山からは銅鏡が、大竹西からは鑄鉄の鉄剣が出土している。伊丹市宮之前からは青銅製釣針が出土している。

韓式土器と呼ばれる朝鮮半島南部系の土器は、堺市浜寺日明山・東大阪市水走・八尾市美園をはじめ、大阪湾沿岸の各地域でみられ、次期への過渡期に慶尚北道氷川琴湖面魚隠洞を源流とする小形仿製鏡がみられ、尼崎市下坂部・枚方市高塚山・八尾市亀井・八尾南・豊中市山ノ上など各所から検出されている。

淡路島の場合は特殊である。西浦海岸では弥生文化の受容は西淡町治郎谷遺跡ではじまり、西淡町志知川沖田南遺跡で定着する。この遺跡では弥生後期に水田址や59.4cmの長さのなすび形木鋤を出土している。東浦海岸では洲本市武山遺跡で弥生文化を受容し、洲本市安乎間遺跡を経て洲本市下内膳遺跡で定着する。しかし弥生前期の遺跡は短期間で一旦途絶え、中期中葉以降に再住がおこなわれる。ただし、弥生前期新段階末にはじまる下内膳遺跡だけは継続し、400m四方の地域に拠点集落を営んでいる。後期には周辺に森・寺中・大森谷・大西・薬師遺跡が存在する。中期～後期と継続する武山遺跡は、後期には周辺に下加茂岡（淡路島で最初の



淡路島津名郡出土銅鐸

住居址を検出)・尾崎・亀谷山遺跡を出現させている。しかし、すべての遺跡が弥生後期で途絶え、古墳時代には続かない。津名郡でも100～150mの尾根上に約50の弥生後期遺跡があるが、全て古墳時代には続いていない。

淡路島からは約20個の銅鐸が出土している。洲本市中川原鐸は菱環鈕式横帯文鐸、他は外縁付鈕式鐸で何れも古式銅鐸である。大半が三原郡に集中しており、北部からは津名郡一宮町江井崎桃川鐸(尼崎市本興寺蔵)だけである。西淡町古津路では中細形銅剣14本が一括出土し、古津路を含む慶野松原からは銅鏃が出土している。

淡路の弥生前期・中期・後期の遺跡の実態については大阪湾沿岸諸地域と大差は無いが、弥生後期で全ての遺跡が廃絶するのはどのような理由によるのであろうか。とくに北部に集中した後期の約50に達する高地性遺跡の廃絶などは戦乱を推測させる。紀記神話では日本列島誕生の最初の地であるが、軍事・交通・交易の要衝であったがために、他地域とは異なる弥生時代の終焉をみたようである。

5. 中国史料にみえる倭国の記事

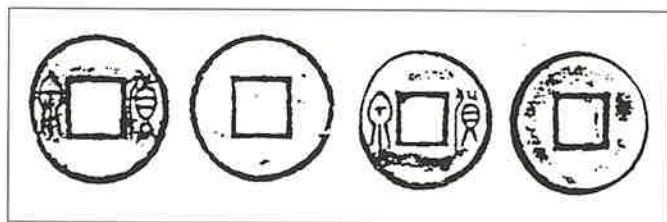
中国史料に見える弥生時代の日本列島のことと考えられる記事は、文献史料の欠如する時期でもあるので、参考になる。ただし、史料価値の問題、倭・倭人とあっても日本列島の住民を指すのかどうかという分析は必要である。

倭人という記事の最古のものは『論衡』(後漢の王允の著)にある「周公や成王の時代(B.C. 11世紀の頃・縄文後期の頃)に倭人が暢草(香草説や靈芝説がある)を献じた」

という記事である。次いで、漢代初期には存在したといわれる『山海経』第12海内北経にある「葢国は鉅燕^{かん}の南、倭の北に在り、倭は燕に屈す」という戦国時代(B.C. 5～3世紀頃)の記事がある。

中国正史の最古のものは前漢の司馬遷の『史記』(B.C. 1世紀)であるが、これにつづく正史は、後漢の班固が撰した『漢書』で、その第28巻地理志には「それ楽浪の海中に倭人有り、分れて百余国を爲す。歳時を以て来り献見すと云う」とあり、古来、日本列島のことを指す最初の記事をされている。B.C. 202年に劉邦によって前漢が成立し、その後、武帝によって元封3年(B.C. 108)には衛氏朝鮮支配の全領域を版図とし、楽浪・真蕃・玄菟・臨屯の4郡を置き、楽浪はその中心で、平壤付近といわれている。『漢書』では異民族は「四夷伝」に記述し、「地理志」には漢の領土を記しているの、この時期(弥生中期)の倭人は百余国に分かれていても楽浪郡の支配下にあったと「地理志」の編者はみていたらしい。

A.D. 8年に前漢は滅亡し、王莽の「新」が成立するが、25年には後漢が誕生する。短期政権の新が鑄造した銅銭「貨泉」が弥生時代中期末・後期の遺跡から検出されるので、政変による亡命者を含めて日本と交流があったことは確認できる。貨泉は岡山県・大阪府・佐賀県をはじめ、長崎県・熊本県・宮崎県・福岡県・広島県・京都府・長野県など日本の各地域で検出さ



貨泉

れている。

『後漢書』光武本紀では建武20年（44）「東夷韓国の人が衆を率いて楽浪にいたる」という記事があり、翌21年には「鮮卑が遼東を寇し、遼東太守祭彤がこれを破る」とあり、23年には「高句麗が種人を率いて楽浪にいたる」とあり、25年には「貊人が寇したので遼東太守祭彤がこれを降す。烏桓の大人が衆を率いて内属す」とあり、次いで建武30年（54）には「鮮卑の大人が内属朝賀す」とある。光武帝の時代に、東アジアの政情の安定とともに周辺諸民族が後漢の支配体制下に入ったことと、後漢の統制力が四周の国々に及んだことを推測できる。『後漢書』は5世紀前半に南朝の宋の范曄が撰したもので、その「列伝75東夷」条には「建武中元2年（57）、倭奴国貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」とある。大陸・朝鮮半島の諸民族が後漢の支配下に入った情報を知った倭奴国は、いち早く後漢に朝貢し、その冊封下に入って、後漢の権威を背景に地位の保全と勢力の拡大をはかったらしい。東アジアの辺縁部に所在していた倭人達が中国の政情の変化に敏感に反応し、対応していた実態が推測できる。倭奴国王は後漢の権威と支援を背景として倭人社会に地域的支配体制を伸張したであろうし、官職機構・外交機能・情報機構も作動していたらしい。

弥生時代の遺跡から発見される中国・朝鮮半島渡来の遺物、例えば北方系文物を代表する多鈕細文鏡（細線鋸齒文鏡）の点在（柏原市からも出土）、漢式三翼鏃（芦屋市から2点出土）や大型鉄鏃、北九州に顕著な支石墓の墓制、前漢鏡・後漢鏡・各種青銅武器・土器などは、中国・朝鮮半島との水上の道による人間の交流の結果にもとづくものである。

天明4年（1784）福岡県志賀島で「漢委奴国

王」と薬研彫りされた純金印が発見され、光武帝から下賜された倭奴国王の金印であり、委奴国は北九州に実在したとされて今日に至っている。「カンのワの



金印「漢委奴國王」

ナの国王」・「カンのイト国王」など読み方の問題、薬研彫りと箱彫りの彫り方技法の問題、発見者とされる甚兵衛なる人物の確認問題など真印説と偽印説はあるが、一応真印とされ国宝になっている。大月氏王や匈奴王と同格に扱われたのは異例かも知れないが、後漢の遠交近攻策の結果ともみられる。

後漢の安帝の永初元年（107）には「倭国王帥升等生口160人を献じて見えんことを願い請う」という記事がある。倭国王のもと身分差のある社会が存在したことを示している。北九州では伝統的墓制であった支石墓がみられなくなり、甕棺に代表される地域首長墓も姿を消していく弥生後期の時期にあたる。

後漢では中平2年（185）には張角による黄巾の乱がおこり、初平元年（190）には董卓が献帝を擁して権力を握ったため中原は大分裂した。この時期、後漢靈帝の中平年号をもつ鉄刀（節刀）が天理市東大寺山古墳から出土しており、後漢と大和に何らかの関係があったことを推測させる。建安2年（204）には公孫康が帯方郡を創設し、『魏志韓伝』では「これより後、倭・韓ついに帯方に属す」という事態となる。

一方、『後漢書』東夷伝には「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主なし。一女子有り、名を卑弥呼と曰う。年長じて嫁せず。鬼神の道に事え、能く妖を以て衆を惑わす。是に於て、共に立てて王と爲す」とあり、共立された女王卑弥呼の出現の前の桓帝（147—

167)と靈帝(168-188)の時期に倭国大乱が発生したことが記されている。瀬戸内海沿岸・大阪湾沿岸に軍事集落の要素をもつ弥生後期の高地性遺跡が顕在することと無関係ではなさそうである。

『魏志倭人伝』には「其の国、本亦男子を以て王と爲し、住ること7・80年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王と爲す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婦無く、男弟有り、佐けて国を治む」とあり、帥升王の時期以来、倭国内乱の発生していたことを記している。『梁書』や『北史』にも靈帝の光和年中(178-183)に倭国大乱のあったことが記されている。

この時期の倭人については、安徽省亳県元宝坑村一号墓出土の74号埴に「有倭人以時盟否」なる陰刻文があり、靈帝の建寧2年(170)銘の埴もあり、被葬者が倭国と関係の深い会稽の太守であることも注目される。

220年には後漢は滅亡し三国時代に入るが、この年に曹丕は魏帝となり、翌221年に劉備が蜀帝、229年に孫権が呉帝となる。景初1年(237)から2年にかけての魏の遼東攻撃で公孫氏は滅亡する。遼東・朝鮮半島の政情が一転した景初3年(239)「倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡(帯方郡)に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む」という『魏志倭人伝』の記事になり、帯方郡太守劉夏は吏に命じて使者を洛陽まで送らせる。洛陽の都に到着した倭女王の使者は、親魏倭王の称号と金印紫綬・銅鏡100枚など数々の賜物や滞在中に収集した珍品をみやげに卑弥呼女王の許に帰国する。正始元年(240)に帯方太守弓遵・梯携らに詔書・印綬を託し、倭国に派遣する。倭女王は使者に対し上表、謝辞を陳べるという手順も記されている。

女王卑弥呼は魏帝を宗主と仰ぐ政治体制を選び、30余国の地域的連合国家に指導力を発揮したらしい。

『魏志倭人伝』には邪馬台国の地形・自然・物産・慣習・社会などの国情が録されており、大人・下戸・奴婢の身分制社会、大人に対する下戸の対応にみられる拍手を打って礼拝し、土下座して命を聞くという、現代の神社祭祀にみられる礼拝形式が弥生時代まで遡上することを示す記事もある。文献史料を欠如する時期であり、官職・法制・税制・軍事・祭儀・外交・宮殿・墓制など古代国家の機能と情報機能をもった階級社会の実情を知ることができる貴重な参考史料である。243年には卑弥呼女王は、大夫伊聲耆・掖邪狗らを派遣朝貢、245年には帯方郡に託して大夫難升米に黄幢が賜与され、247年には載斯烏越を帯方郡に派遣して狗奴国との年来の交戦を報告し、大守王頔は張政らを倭国に派遣し「倭人を告諭す」という記事になる。邪馬台国は男王の狗奴国と交戦を続け、魏の援助を要請していたが効なく、247年~248年に卑弥呼女王は戦死の可能性もあるが亡くなり、大いに冢を造ることになる。この時期には巨大前方後円墳の箸中山古墳などが築造されるようになる。倭国は再び内乱の時期を経験し、卑弥呼の宗女台与が共立されて内乱は終わるが、西晋の武帝の時、泰始2年(266)の倭女王(台与)遣使の記事を最後に、邪馬台国・倭国の記事は中国史料から消えることになる。弥生時代の宝器であり儀器であった銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈などの青銅儀器が埋納されて再び取り出されることは無く、軍事的要因をもった高地性遺跡が姿を消し、弥生時代の終末を迎えるのが、この頃である。

6. 古墳時代

A.D. 250～700年頃の時期を古墳時代と呼んでいる。東大阪市瓜生堂遺跡や大阪市長原・加美遺跡の弥生墳丘墓は構造的には古墳の源流である。八尾市山賀遺跡など陸橋部をもつ方形周溝墓も形状的には古墳の源流である。高度の設

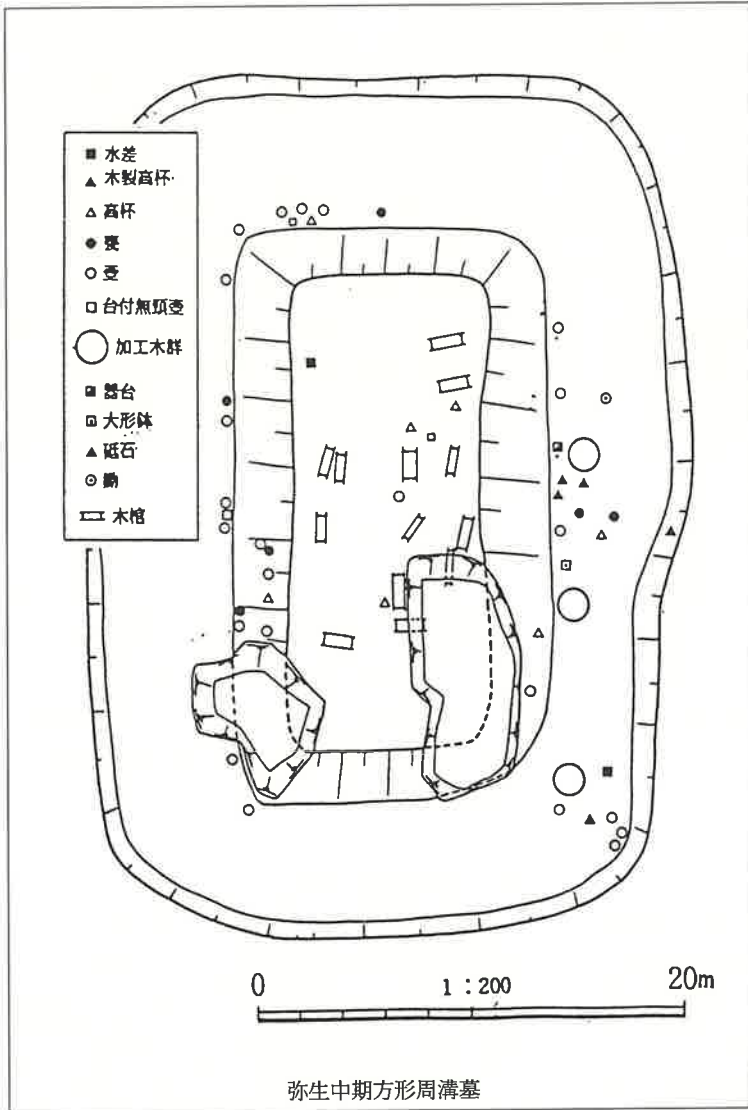
計・土木技術と労働力と経済力と強大な統制力をもった支配階級の出現によって、権力のシンボルである古墳がつくり出されたといえる。

(1) 前期古墳

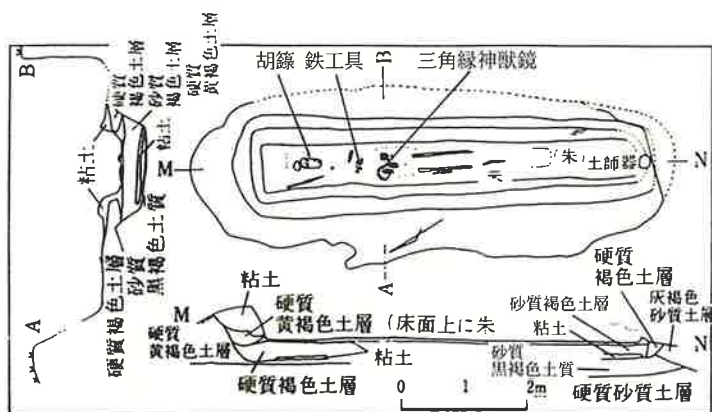
前期古墳は大阪湾沿岸の丘陵・山頂・山腹部に示威的に築かれる場合が多く、木棺・長持型石棺などに漢式鏡・刀剣・硬玉や碧玉の勾玉や

管玉類・鉄工具類・呪的要素の強い石釧や鍬形石などを副葬品として納め、竪穴式石槨か粘土槨の構造が主で、墳丘の形式は前方後円墳が多い。

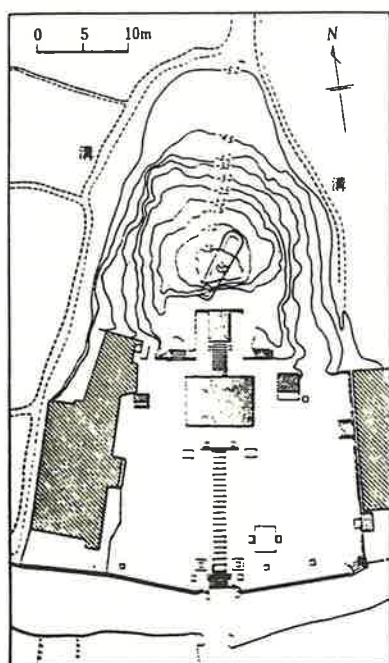
4世紀前半を代表する和泉市黄金塚古墳は全長85m、後円部で3基の粘土槨が発見され、中央槨出土品に「景初三年陳是作諸銘之保子宜孫」の銘文のある画文帯重列式神獸鏡があり、邪馬台国の女王卑弥呼が魏の明帝から「親魏倭王」の称号と「銅鏡百枚」を贈られたという『魏志倭人伝』の記事との関連で注目されている。また、5面の鏡を出土した高槻市安満宮山古墳では「青龍三年」（235年）銘のある方格規矩四神鏡が含まれている。4世紀初頭に比定されている柏原市松岳山古墳では、4世紀中葉に前方部を削除して茶臼塚古墳が営まれている。この古墳は一辺が約20m四方で、3段築造の積石塚である。内部主体の竪穴式石槨内からは、鏡・碧玉製釧や鍬形石な



大阪市加美墳丘墓（報文による）



尼崎市水堂古墳（粘土槨）



水堂古墳墳丘平面図

ど日本の前期古墳特有の呪的色彩の強い遺物が多量に検出されたが、墳墓の築造法は高句麗の積石塚の形式である。韓国ソウル市江東区石村洞の積石塚も高句麗の影響で築造されたとされているが、大阪湾沿岸にも同時期の高句麗系墳墓が存在する。4世紀後半の茨木市紫金山古墳

は、長さ7mの竪穴式石室をもち、鏡12面のほか、直弧文をきざんだ貝輪も出土している。この時期に属するものとしては、池田市茶臼山古墳、豊中市待兼山古墳・御神山古墳、四条畷市忍岡古墳、八尾市花岡山古墳群などがある。

兵庫県下では、播磨の揖保川町に弥生時代後期から古墳時代前期に継続する養久山古墳群、権現山古墳群・梶山古墳群があり、権現山51号墳からは特殊器台形埴輪・三角縁神獸鏡5面・鉄製武器・農具類が出土している。摂津では神戸市の処女塚古墳・西求女塚古墳・ヘボソ塚古墳、芦屋市の親王塚古墳、宝塚市の万頼山古墳・安倉古墳、墳頂部に3重の礫葺石をもち、埴輪・玉類を出土しない尼崎市の水堂古墳などが有名である。安倉古墳からは呉の「赤鳥七年」（244年）銘の画文帯神獸鏡が出土している。西求女塚古墳からは12面の銅鏡・冑小札・刀・剣・槍・鉾・斧・ヤリガンナ・ノミ・ヤスなどの鉄製品、碧玉製の紡錘車形石製品などの副葬品が検出され、墳頂部では山陰系の小形丸底壺、鼓形器台・低脚坏・大型二重口縁壺があり、くびれ部で検出された古式の布留式土器は当古墳の築造時期を推定させる。

(2) 倭の五王について

「倭の五王」については、『晋書安帝紀』・『南史倭国伝』・『宋書倭国伝』（5世紀後半、南朝梁の沈約の撰した南朝宋の正史。『夷蛮倭国条』に倭の五王の記事がある。）に記載がある。

413年に倭（王讃）の遣使があり、同年高句麗も遣使している。これは391～404年に至る高

句麗・倭の交戦の結果、中国から朝鮮半島での優位性を認められようとした外交合戦ともみられる。結果は、高句麗・百済の外交が成功し、倭の政治力は劣っていたようである。416年に高句麗王（長寿王）は征東大將軍に叙せられ、420年には百済王が鎮東大將軍に叙せられている。倭については421年「倭讃、修貢、爵号を授与される」の記事があり、425年「讃、司馬曹達を遣わし上表、貢獻」。430年「倭国王貢獻」。438年「倭国王珍、貢獻、“使持節都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王”と自称・「安東將軍倭国王」に叙せられ、「倭隋ら13人、將軍号」を受く。443年「倭国王濟、朝貢」・「安東將軍倭国王に叙せられる」。451年「倭王倭濟、安東大將軍に進められる」・「倭国王濟、使持節都督新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事を加えらる」・「濟、23人に將軍・郡号授与を要請」。460年「倭国、貢獻」。462年「倭国王世子興、安東將軍に任命」。463年には高句麗王は車騎大將軍に叙せられている。477年「倭国、貢獻」。478年「倭王武、上表し開府儀同三司を仮称。使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王に叙せられる」とあり、倭王武は上表して高句麗・百済王の爵位と対抗しようとしたが成功はしなかった。「倭国は高驪の東南大海の中に在り、世世貢職を修む。高祖の永初二年（421）、詔して曰く、倭讃、萬里貢を修む、遠誠宜しく甄すべく、除授を賜う可し。太祖の元嘉二年（425）、讃、又司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献ず。讃死して弟珍立つ。使を遣わして貢獻し、自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東將軍・倭国王に除す。珍、又倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号に除正せんことを求む。詔して並びに

聽す。二十年（442）、倭国王濟、使を遣わして奉獻す。復た以て安東將軍・倭国王と爲す。二十八年（451）、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東將軍は故の如く、並びに上つる所の二十三人を軍郡に除す。濟死す。世子興、使を遣わして貢獻す。世祖の大明六年（462）、詔して曰く、倭王世子興、奕世載ち忠、藩を外海に作し、化を稟け境を寧んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東將軍・倭国王とすべし。興死して弟武立ち、自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王と称す。

順帝の昇明二年（478）、使を遣わして表を上る。曰く、封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖櫛躬ら甲冑を擐き、山川を跋涉して、寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国。王道融泰にして、土を廓き畿を遐にす。累葉朝宗して歳に怠らず。臣、下愚なりと雖も、忝なくも先緒を胤ぎ、統ぶる所を駭率し、天極に帰崇し、道百済を遙て、船舫を装治す。而るに句驪無道にして、図りて見吞を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まず。毎に稽滯を致し、以て良風を失ない、路に進むと曰うと雖も、或いは通じ或はならず。臣が亡考濟、実に寇讐の天路を壅塞するを忿り、控弦百萬、義声に感激し、方に大举せんと欲せしも、奄かに父兄を喪い、垂成の功をして一蕘を獲ざらしむ。居りて諒闇に在り、兵甲を動かさず。是を以て、偃息して未だ捷たず。今に至りて甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁、文武功を効し、白刃前に交わるとも亦顧みざる所なり。若し帝徳の覆載を以て、此の疆敵を摧き、克く方難を靖んぜば、前功を替えること無し。竊かに自ら開府儀同三司に假

し、其の余は威假授して以て忠節を勤む。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王に除す。」と『宋書倭国伝』にみられ、六国・七国の都督・諸軍事号の要請や將軍・郡号の要請や高句麗遠征計画・国内統合の戦闘の記事からみると、強力な国家的規模の王権の存在を想定できる。479年「倭王武、鎮東大將軍に進められる」。480年には高句麗王は最高位の驃騎大將軍となっている。502年「倭王武、征東（大）將軍に進められる」。

この413年から502年におよぶ遣使記事の倭王、讃・珍・済・興・武を「倭の五王」と称し、日本書紀の皇統譜と照合したり、巨大古墳群の陵墓に比定したりする考察がおこなわれている。

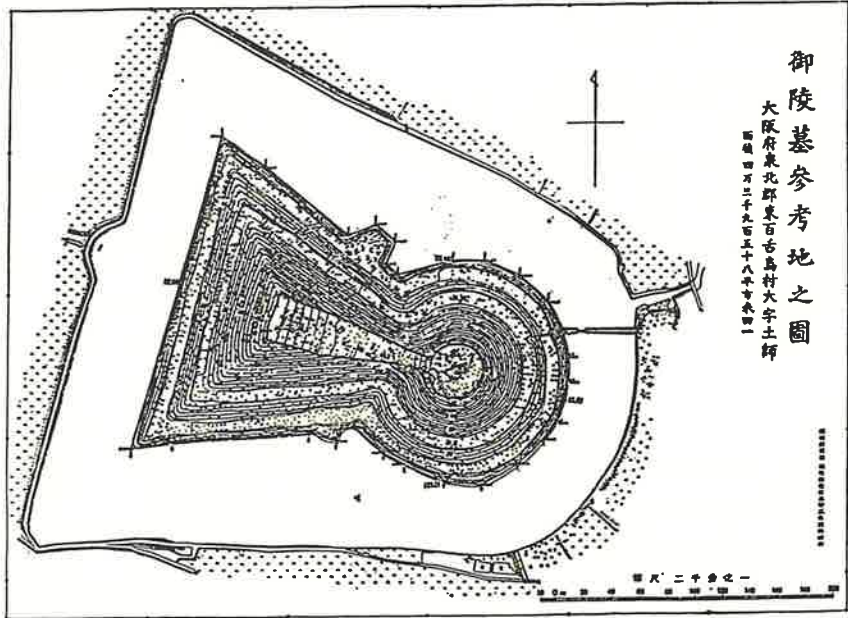
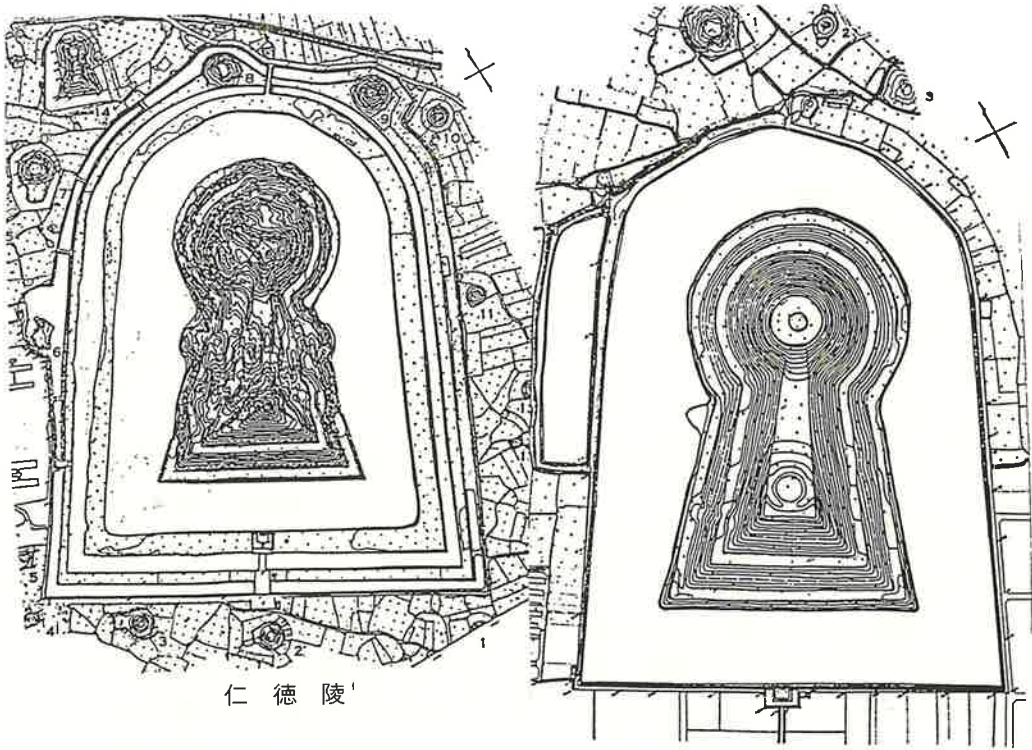
また、この中国への外交競争は391年・396年・399年・400年・404年におこなわれた高句麗と倭国の戦いの結果であり、この戦闘の記事が集安の丸都城に414年に長寿王によって建立された、好太王（413年没）の顕彰碑に記されている。日本では中期古墳の時期にあたる。

(3) 中期古墳

中期古墳は南河内地域の5世紀の巨大前方後円墳群を代表とする。全長150m以上の古墳だけでも21基を数える。なかでも大仙古墳（仁徳天皇陵・486m）、菅田御廟山古墳（応神天皇陵・415m）、上石津ヶ丘古墳（履中天皇陵・365m）、河内大塚山古墳（陵墓参考地・雄略天皇陵に比定？・335m）、土師ニサンザイ古墳（陵墓参考地・290m）、岡ミサンザイ古墳（仲哀天皇陵・242m）、太田茶臼山古墳（継体天皇陵・229m）、市ノ山古墳（允恭天皇陵・227m）などは5世紀の支配階級である大王たちの富と権力を知る尺度となる。日本では天皇陵に治定されている古墳は宮内庁が管理し、学術調査は許されてい

ない。歴史関係14学会では、毎年宮内庁に立入り調査を要望しているのであるが、未解決の事項となっている。しかし、陵墓古墳の周辺地域の発掘調査や宮内庁所蔵の出土遺物・陵墓の実測図、宮繕工事に際しての14学会代表の見学などによって、陵墓に治定されている古墳の相対年代はかなり判明しており、日本書紀の皇統譜の記述に合致しにくい例もみられる。ただ、奈良県下の前・中期古墳出土の呪的儀器・旧式の武器・武具類と比較すると、大阪湾沿岸の古墳は最新鋭の武器・武具・甲冑類を豊富に副葬していることが指摘される。5世紀の日本においては、河内の古墳群の被葬者たちが最新鋭の武器・武具をもつ最強大武装集団であったことは明らかであり、その墳墓の偉容さは他地域では比較できないものであり、いかにも大王権の所在地にふさわしいものである。当然、『宋書倭国伝』の讃・珍・済・興・武という「倭の五王」の時期に当たるため、その比定も河内の巨大古墳群の中で行われることになる。

時期と規模からみて仲ツ山古墳（仲津媛陵・古市古墳群）が讃、上石津丘古墳（履中天皇陵・百舌鳥古墳群）・菅田御廟山古墳（応神天皇陵・古市古墳群）が珍か済、大仙古墳（仁徳天皇陵・百舌鳥古墳群）が済か興、市ノ山古墳（允恭天皇陵・古市古墳群）が興、土師ニサンザイ古墳（陵墓参考地・百舌鳥古墳群）が武ということになる。讃の支配する倭が日本のことであれば、高句麗好太王碑文の交戦の記事（391—404）の時期に当たる。倭王武を雄略天皇とみる研究者が多いが、埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳の太刀銘にみられる「ワカタケル」は雄略天皇かも知れないが、雄略天皇が倭王武であるという証明は難しい。「ワカタケル」も地域首長とみる説がある。讃を応神・仁徳天皇に当てる研究者もいるが、皇統譜に抱束される結果で



中期古墳（宮内庁報文より）

ある。陵墓を当代に君臨した公人という観点から学術調査の対象とされる日を待ちたい。河内の巨大古墳群からは最新鋭の武器・武具・馬具などが検出されるが、全国的にみても群を抜く量である。例えば眉庇付冑は全国で95領余が確認されており、その内金銅装のものは13領で、内7領が近畿地方の出土である。朝鮮半島出土の甲冑とは量も技術も異なっている。また多量の三角縁神獣鏡や画文帯神獣鏡などの鏡が各古墳に副葬されているが、朝鮮半島・中国の副葬の様子とは異なる。

5世紀前半の羽曳野市丸山古墳は応神天皇陵陪塚といわれ、朝鮮半島との交流による輸入品とみられる金銅透彫鞍金具の出土で知られている。応神陵古墳、茨木市の継体陵古墳、堺市の大塚古墳、八尾市中心合寺山古墳などがこの時期のものである。5世紀後半の美原町黒姫山古墳からは24領の短甲と冑が発掘されて注目された。百舌鳥古墳群の仁徳陵古墳・履中陵古墳などもこの時期のものである。上町台地に巨大な倉庫群が検出されるのもこの時期である。

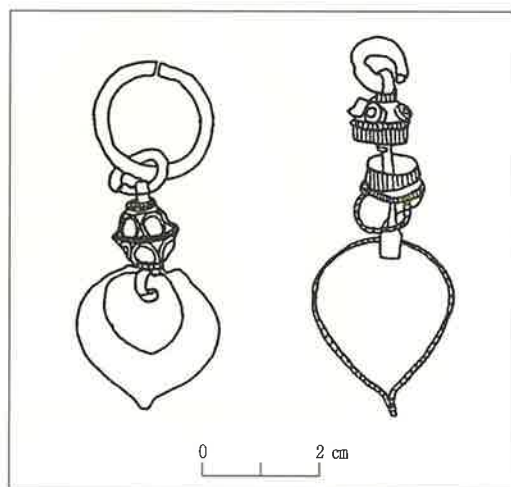
兵庫県下では、中期古墳は大阪府下とは比べべくもない状況で、神戸市の五色塚古墳が194m、播磨の壇場山古墳と丹波の雲部車塚古墳が140mの規模をもつ。この時期に高砂市の竜山石切場（流紋岩質の凝灰岩と産出）から長持型石棺材が切出され、滋賀県から山口県に至る地域から検出されている。

(4) 後期古墳

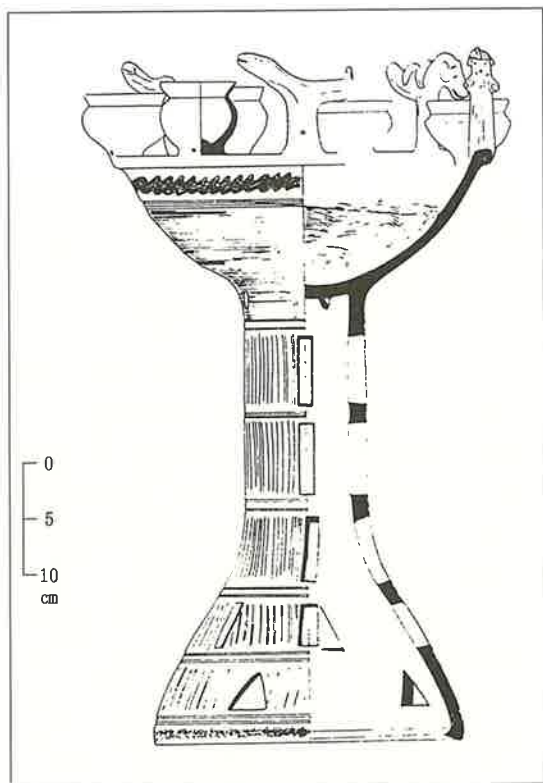
後期古墳では、6世紀前半と推定される高槻市今城塚古墳は外濠を含めた長さは350m、前方部の幅は340mで、継体天皇陵に比定する説が有力である。その陪塚からは最終期の長持形石棺が出土している。羽曳野市の白鳥陵古墳なども、この時期である。

6世紀後半の古墳には堺市の反正陵古墳、羽曳野市の安閑陵古墳・清寧陵古墳などがあるが、安閑陵古墳からは口径12.2cm・高さ8.2cmのガラス製白瑠璃碗が出土している。表面に数十個の円形切子をほどこしたペルシア渡来の逸品である。6世紀前半の大規模な古墳は大阪府下には数多く遺存するため、大王陵墓にふさわしい、また、陵墓として治定されている古墳の若干をあげるにとどめておきたい。なぜなら、大阪府下では摂津市を除き、後期古墳の遺存しない地域は皆無といって良い位に多いからである。

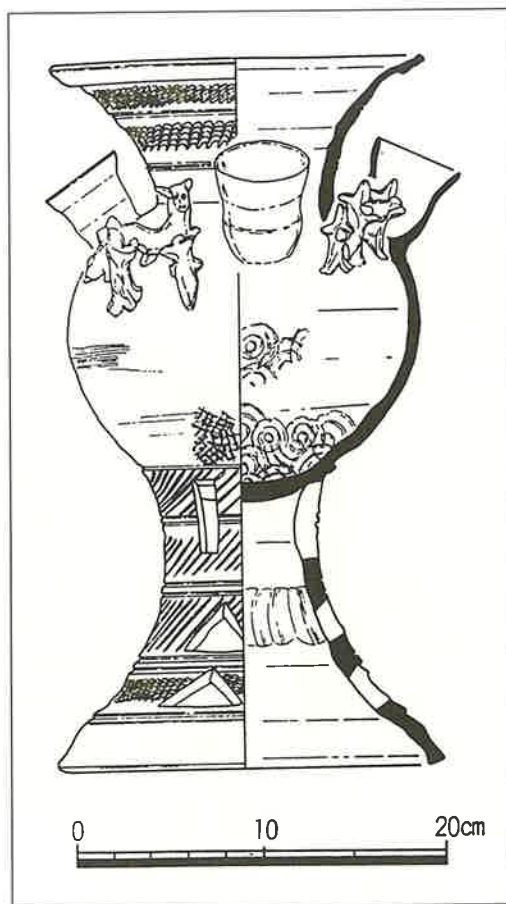
6世紀後半以降は火葬古墳も出現し、千里丘陵・北摂の丘陵・生駒山地西麓・羽曳野丘陵・信太山丘陵などに横穴式石室をもつ群集墳の築造がさかんになってくる。これらの群集墳は7世紀には追葬墳として再使用されているものが多い。和泉市信太千塚・堺市陶器千塚・羽曳野市飛鳥千塚・柏原市玉手山横穴群・高井田横穴群・八尾市高安千塚・高槻市塚原古墳群・河南町一須賀古墳群などが代表である。この時期にも池田市鉢塚古墳・八尾市愛宕塚古墳のように巨大な横穴式石室を持つ上円下方墳・円墳があ



(右) 八尾市郡川東塚出土 銀製垂下飾付耳飾
(左) 龍野市西宮山古墳出土 金製垂下飾付耳飾



八尾市高安千塚出土 装飾付子持器台
(大阪城天守閣蔵)



龍野市西宮山古墳出土 装飾付子持壺
(京都国立博物館蔵)

る。併行して5世紀初頭以来の須恵器窯跡（陶邑・岸部など）や集落址・埴輪窯跡などの工房址も各所で検出されている。

兵庫県下でも後期の古墳は爆発的に増加している。最も古い横穴式石室を持つ龍野市西宮山前方後円墳は、持ち送りの強い穹窿式と呼ばれるドーム型の石室で、平面形も方形に近く、相模を表現した装飾付台付面や器台・坏など多量の須恵器・土師器、純金製垂飾付き耳飾り（高句麗系）、鏡、金鍍金の杏葉・鍔などの馬具類、鉄剣・鉄鏃などの武具類、鉄製U字形鍔先、青銅製三輪玉・琥珀製裏玉・ガラス小玉類、各種形象埴輪と円筒埴輪などが出土している。八尾市郡川東塚（前方後円墳・横穴式石室）では銀製垂下飾付耳飾りや、和歌山県隅田八幡神社の

原鏡である「尚方作神人画像鏡」を出土している。姫路市見野長塚古墳・諏訪神社古墳・御大師山古墳も前方後円墳で、主体部は横穴式石室である。西宮市苦楽園古墳は二石室に外護列石をめぐるせた円墳である。6世紀はじめには明石市赤根川・金ヶ崎窯で角坏・装飾付須恵器・陶板など特殊な遺物を出土している。尼崎市の園田大塚山古墳は標高7mの平地に立地し、全長45mで幅10mの周濠をもつ。神獸鏡系五鈴鏡・碧玉製管玉・蜻蛉玉・鉄刀を出土した北主体、直刀1・刀子3・槍2・鉄鏃100以上・鉄鋸2・小鉄斧1・小鉄鎌1・鉄輪2・鞍金具1・鍔金



芦屋市出土 ミニチュア土器

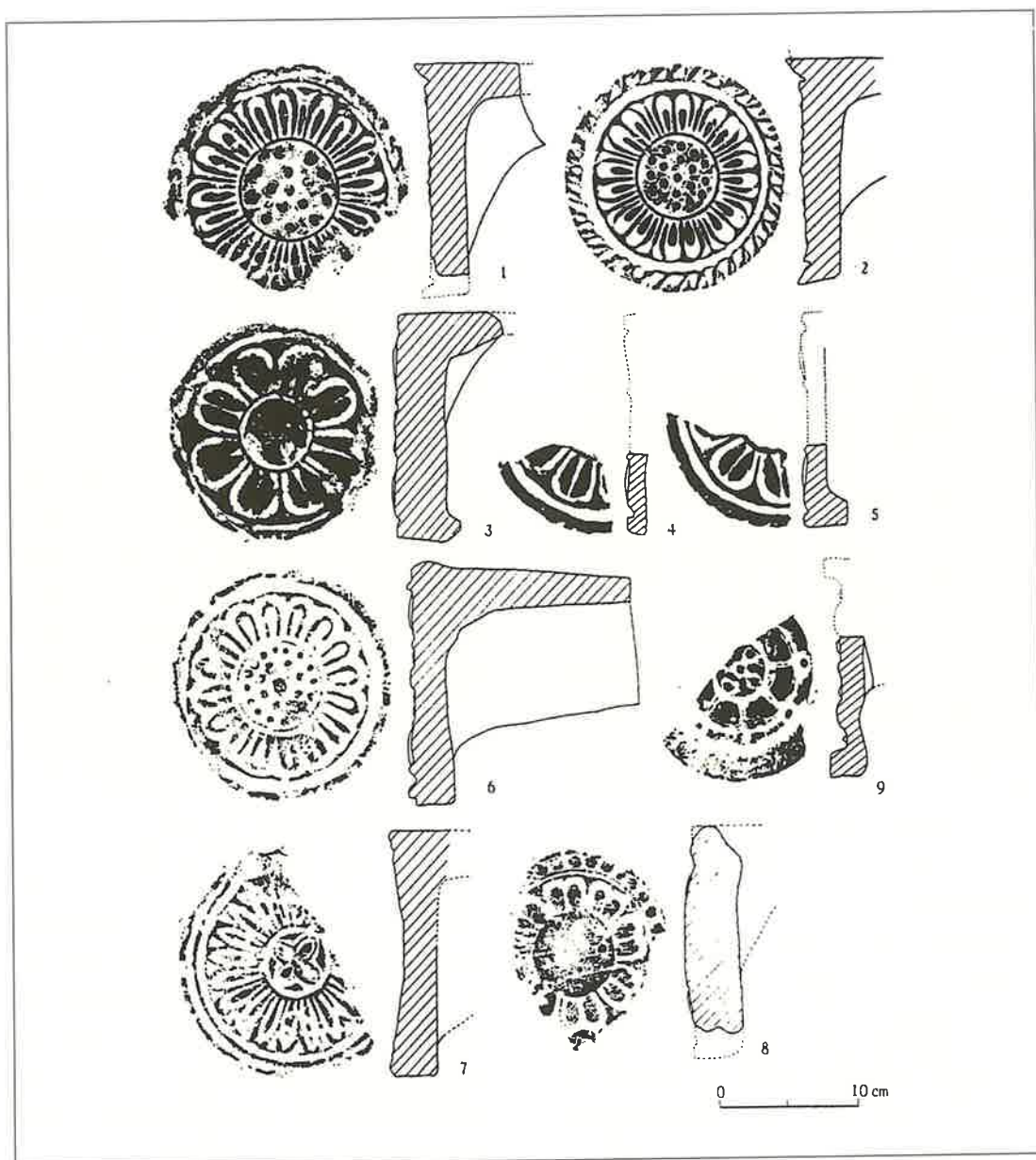
具1・轡1・杏葉5・雲珠3・飾金具16・鉄具2・MT15型式の須恵器類・川西編年Ⅴ期前半の埴輪を出土した南主体の2基で何れも木棺葬である。6世紀前半とみてよからう。兵庫県下でも6世紀後半の後期古墳・群集墳の遺存しない地域はなく、群集墳の中でも地域首長墓・独立墳は検出されている。また、土師器の甕・釜・甑のミニチュアセットは渡来系氏族と関連するものであるが、芦屋市三条古墳群・城山古墳群でもみられる。

(5) 終末期古墳

終末期古墳は7世紀に比定される。宝塚市中山荘園古墳は長尾山の南斜面、標高76mの地に

風水思想に則って選択立地したとされ、径10mの規模で、外護列石が6辺を形成、南側前庭部で方形壇状に張り出す。外護列石は2列を基調とするが3列にみえる部分もある。内部構造は石槨風の小横穴式石室で、朱塗りの木棺の単体埋葬と推定されている。7世紀中葉の物部氏系の若湯坐氏を被葬者に想定する見解もある。尼崎市東園田遺跡では終末期の建物群・井戸・溝状遺構が検出されている。芦屋市三条岡山遺跡では長さ8mの舟形状土壇と土壇内で鳥居状構造物を想定させる柱穴2が検出され、供献遺物として子持勾玉・銀装太刀柄頭・鉄刀・須恵器大甕・土師器類があり、海上交通と関連する(山立て)祭祀遺構とも考えられる。

大阪府下の終末期古墳は前代に比して激減し、太子町と羽曳野市及びその周辺に集中している。大阪湾沿岸での古墳の築造は7世紀をもってほぼ終ると考えられる。柏原市松岳山から出土したとされる銅板の「船氏の墓誌」の銘文によると、船首王後は舒明天皇13年(641)に死亡し、死後27年たった天智天皇7年(668)に兄の刀羅古の墓に並べて墓が作られたとあり、夫人の死にさいしての改葬と推定されるが、当時の風習を知る手掛かりとなる。大阪府は日本で最初に火葬が行われた地域であり、堺市の陶器千塚のカマド塚を代表とする。この火葬墳は和泉市聖神社古墳群・道田池古墳群・菩提池古墳群、堺市檜尾古墳群、茨木市上寺山古墳などで次々と知られ、カマド塚という名称が一般化することになった。現在では兵庫県から静岡県までの地域で検出されている。終末期古墳を代表するのは太子町叡福寺北古墳で聖徳太子墓に治定されている。聖徳太子は推古天皇29年か30年(621・622)に没した人であり、径54m・高さ約7mの円墳で、両袖式の切石造りの横穴式石室をもち、玄室内に3棺があり、北奥の1棺は石棺、



猪名寺廃寺出土土瓦（報文より）

南に並ぶ2棺は夾紵棺とされている。北奥の石棺が母の穴穂部間人皇后・南の東棺が聖徳太子、南の西棺が太子妃と推定されている。

7. 古代

終末期古墳の減少に比し、7世紀は氏寺・氏神社造営の胎動が始まる時期でもある。

高句麗系・新羅系・百濟系・中国系といわれる瓦の諸型式や伽藍配置が豊富に遺存するのも大阪湾沿岸という先進性地域の特色で、付随して7世紀以来の瓦窯址も枚方市楠葉をはじめ各地で検出されている。

大阪市の四天王寺、枚方市の百濟寺跡・百濟王神社、藤井寺市の葛井寺・辛国（韓国）神社・道明寺、柏原市の大貊神社・智識寺跡、富田林市の新堂廃寺・鹿谷寺跡、羽曳野市の飛鳥戸神社・誉田八幡宮・野中寺・西琳寺、八尾市秦興寺跡・高麗寺跡、寝屋川市の高宮廃寺、茨木市の太田廃寺、尼崎市の猪名寺廃寺、伊丹市の伊丹廃寺、芦屋市の芦屋廃寺などがその例である。

記録にみられる中国・朝鮮半島との交流・交易は、そのほとんどが難波津を出発港とし、賓客・外国使臣の上陸地も難波津であったから、文物輸入の中心的窓口でもあった。中国・朝鮮半島からの学者・技術者の居住地も大阪湾沿岸がもっとも多い。種々の移入技術の面では、製陶は5世紀初頭より和泉市大野池窯・堺市狐山窯・和田窯の地域で須恵器の生産をはじめており、6世紀にはいと堺市高蔵寺・和泉市光明池周辺が中心となる。また、宝塚市平井、豊中市桜井谷・長興寺、吹田市岸部を中心とする諸窯跡群、さらに高槻市成合窯跡に至る長尾丘陵・千里丘陵ぞいに生産が展開され、7世紀に入ると漁具や硯や陶棺まで製作するようになった。しかし燃料材伐採のため自然環境は破壊されたと考えられる。

新羅からの移民による難波堀江・茨田堤の築造のほか、狭山池、血沼池、高津池の築造にも渡来人の技術指導があった。

陸上交通路としては、仁徳天皇の時に大道を造り、高津宮の南門から直ちに河内の丹比邑に通じるようにしたと伝えられ、推古天皇の613年には難波から都に至る大道を開いている。飛

鳥への道は、住吉津から大和の小墾田へ抜ける現在の竹の内街道がおもなものであった。難波津から平城京へは暗越・十三越・直越などの生駒山地を越える道と、木津・楠葉を経由する丹波街道が開けた。710年平城遷都がおこなわれた翌年には都亭駅六駅が新設され、河内国では交野郡に楠葉駅を、摂津国では島上郡大原駅・島下郡殖村駅が設けられた。

難波津には各種多数の舟の往来があったが、著明な「割り舟」の発見例は、大阪市内だけでも浪速区船出町・城東区今福町・中央区天神橋・東淀川区豊里菅原町などをあげることができる。とくに福島区船津橋出土の割り舟は5人艫の帆船で、南方産のラワン材製であることは注目される。弥生時代の尼崎市若王寺遺跡からも船材が出土している。他に大阪市長原遺跡や八尾市亀井遺跡からは準構造船の一部が出土しているし、和泉市菩提池西遺跡・大阪市長原高廻り2号墳からは同じ構造の船の埴輪が出土していて、外航船の実態を推定することができる。

宮殿建設では、応神天皇の大隅宮、仁徳天皇の高津宮、反正天皇の河内丹比の柴籬宮、允恭天皇の和泉の茅渟宮、継体天皇の河内楠葉宮、孝徳天皇の難波長柄豊碕宮・同じく味経宮、天武天皇の難波の都の外郭を守る羅城の築営と複都詔による陪都の難波宮、聖武天皇の難波の宮の記事が、日本書紀・続日本紀にみえる。上町台地の法円坂地区では現在も難波宮址の発掘調査と復原がつづけられている。

行基を代表とする僧侶の社会活動も盛んで、720年に行基は河内郡に石凝院を、ついで西成郡に善源院・同尼院、島下郡に高瀬橋院・同尼院を建て、さらに狭山池院などを建てている。行基の足跡は尼崎市・伊丹市域にも及んでいる。とくに猪名寺廃寺の発掘調査では、行基絵伝にみられる猪名寺孤独園池の景観が遺存していた。

「和同開珎」をはじめとする貨錢も各遺跡から検出される。

摂津守藤原致房の子善仲・善算が箕面市勝尾寺を創建したといわれるのが727年で、741年には摂津国国分寺が造営され、奈良時代を通じて難波の地では四天王寺を中心に仏教文化が繁栄した。

733年には遣唐使船が難波津を出発している。754年には唐僧鑑真が難波津に上陸している。

河道の改修も行われ、長岡京への遷都にともない、785年には神下・梓江・鯉生野を掘り、

淀川を三国川に疎通させているし、788年には河内川の付替がおこなわれている。これらは、河川が恩恵とともに災害をもたらしていたことにもよる為政者の「水との戦い」でもあった。794年平安遷都となり、淀川筋が交通上の大動脈となり、大阪湾沿岸の繁栄は変わらなかった。陸路でも山陽道のほか、西国街道が開け、参詣道として高野街道・熊野街道がにぎわった。難波市や住吉市の名も見えるようになる。

（本稿は共同研究補助金による分担研究の成果の一部である。）

